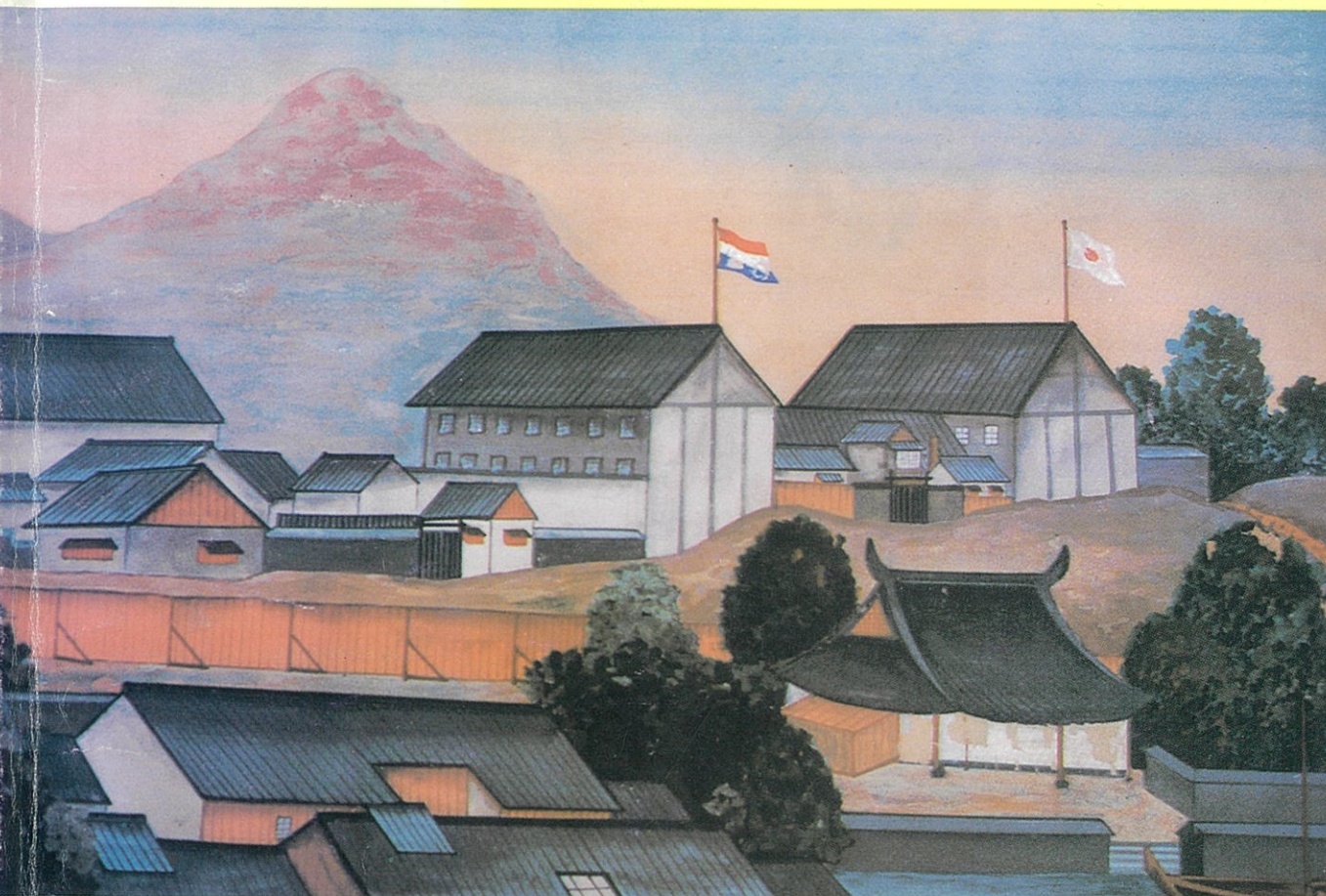


長崎大学医学部 創立130周年記念誌



長崎養生所のスケッチ

文久元年7月1日(1861年8月6日)落成
8月16日(1861年9月20日)開院

長崎大学附属図書館医学分館蔵

1987年

長崎大学医学部

目 次

はじめに	1
記念式典式次第	2
記念祝賀会式次第	3
記 念 式 典	
(1) 開式の辞	6
(2) 式 辞	7
(3) 祝 辞	
① 文部大臣	9
② 在日オランダ王国特命全権大使	10
③ 長崎県知事	13
④ 長崎市長	15
⑤ 長崎大学長	17
⑥ 長崎医学同窓会長	19
(4) 祝電披露 (省略)	
(5) 記念会館目録贈呈	20
(6) 謝 辞	20
(7) 閉式の辞	20
記念講演	
(1) 長崎時代のポンペ	24
(2) 帰国後のポンペ	34
(3) ヨーロッパ状況から見たポンペ	51
写 真	62
おわりに	70

はじめに

長崎大学医学部は長崎医学同窓会との共催により、昭和62年11月12日、長崎大学医学部創立130周年の記念式典および祝賀会を開催しました。そのうちの記念式典は午後1時より、長崎市坂本町の長崎大学医学部記念講堂において、さらに記念祝賀会は午後6時30分より、長崎市万才町の長崎グランドホテルにおいて、それぞれ来賓各位、学外の同窓、学内の教職員・学生の約300名の方の御出席をいただき盛大に行われました。

これらの記念行事が成功裡に終了できたことは偏に関係各位の温かい御理解と御協力によるものであり、ここに厚く感謝申し上げます。本記念誌はその記念式典における式辞、祝辞およびその式典に続いて行われた記念講演の内容を収録したものであります。

私達はこの機会に母校の創立時の輝かしい栄光と伝統とをふり返り、それを誇りとするとともに、そのみに頼ることなく、母校の益々の発展のために、努力することの決意を新たにします。

昭和62年12月1日

長崎大学医学部長 松田源治

長崎大学医学部創立130周年記念式典

1. 日 時 昭和62年11月12日（木） 午後1時～5時
2. 場 所 長崎大学医学部記念講堂
3. 式 次 第 1) 開式の辞

長崎大学医学部附属病院長 山 邊 徹

2) 式 辞

長崎大学医学部長 松 田 源 治

3) 祝 辞

文部大臣 中 島 源太郎

在日オランダ王国特命全權大使 H. C. ポスチュマス メイエス

長崎県知事 高 田 勇

長崎市長 本 島 等

長崎大学長 保 田 正 人

長崎医学同窓会長 城 谷 勝 明

4) 祝電披露

5) 記念会館目録贈呈

長崎医学同窓記念事業会会長 城 谷 勝 明

6) 謝 辞

長崎大学医学部長 松 田 源 治

7) 閉式の辞

長崎大学医学部附属病院長 山 邊 徹

4. 記念講演会

司 会 長崎大学医学部長 松 田 源 治

1) 長崎時代のボンベ

国立療養所長崎病院科長 中 西 啓

2) 帰国後のボンベ

法政大学教授 宮 永 孝

3) ヨーロッパ状況から見たボンベ

日蘭学会常務理事 ウィレム・レメリンク

5. 記念映写会

ボンベから130年 ～長崎大学医学部の歩み～ N. B. C.

長崎大学医学部創立130周年記念祝賀会

1. 日 時 昭和62年11月12日（木）午後6時30分より

2. 場 所 長崎グランドホテル

3. 祝賀会次第
- | | |
|------------------|---------|
| 1) 開会の辞 | 司会者 |
| 2) 挨拶 | |
| 長崎医学同窓会長 | 城 谷 勝 明 |
| 長崎大学医学部長 | 松 田 源 治 |
| 3) オランダ王国大使へ花束贈呈 | |
| 4) 乾 杯 | |
| 長崎医学同窓会副会長 | 寺 崎 昌 幸 |
| 5) 祝 宴 | |
| 6) 万歳三唱 | |
| 長崎医学同窓会副会長 | 内 藤 達 郎 |
| 7) 閉会の辞 | 司会者 |

記 念 式 典

1) 開 式 の 辞

長崎大学医学部附属病院長 山 邊 徹

本日は、皆様方御多用のところ多数御臨席賜りましてありがとうございます。

ただいまより長崎大学医学部創立 130 周年記念式典を挙行いたします。

2) 式 辞

長崎大学医学部長 松 田 源 治

本日、ここに中島文部大臣、メイエス在日オランダ王国大使閣下を初め、多数の御来賓各位をお迎えして、長崎大学医学部創立 130 周年記念式典を挙行することができますことは、この上ない大きな喜びでございます。

長崎大学医学部は、毎年11月12日を創立記念日として祝っております。これは皆様御承知のように、安政 4 年（1857年）9 月26日（陽暦11月12日）にオランダ海軍軍医ポンベ・ファン・メールデルフォールトが当時の長崎奉行所西役所（現在の長崎県庁所在地）の一室において就任披露の講演を行い、それより、一定の講義計画に従って講義を開始したことに由来しています。

この開講講演を聞いた日本人学生たちは、当時の幕府伝習生松本良順以下12名とも14名とも言われています。ポンベは、この開講講演において、自然科学の現状とその文化に及ぼす影響について述べ、さらに、これを臨床医学に応用すべきことを論じ、また学生たちの不撓不屈の勉学を希望し、そのためには可能な限りの援助を与えることを述べたとされており。これらのことは、現代においても立派に通用するすばらしい講演であったと推測されると同時に、28歳の青年医師ポンベの情熱が切々として感じられます。

この日は長崎大学医学部の淵源であるとともに、日本において西洋医学教育が開始された、まことに記念すべき日でもあります。言いかえますと、長崎大学医学部は西洋医学教育において、日本で最も古い歴史を有することになります。この年、講義の場所は大村町（現在の長崎地方裁判所所在地）に移され、医学伝習所と呼ばれました。その後さらに、文久元年（1861年）にはポンベの強い提言により、小島郷（現在の西小島町、佐古小学校所在地）に病院と講義所とが建設され、それぞれ長崎養生所及び医学所と命名されました。この養生所は日本最古の洋式病院であり、当時としては日本では最高の西洋医学による診療を行っていたであろうことが推測されます。

ポンベは、安政 4 年から文久 2 年までの約 5 年間にわたって、長崎において医学の教育と診療を行いました。医学教育においては、物理学・化学などの基礎的な自然科学から基礎医学、さらに臨床医学に至る現代の医学教育の方法と全く同じ方法で、系統的に教育を行いました。そして文久 2 年、ポンベが帰国するまでの日本人学生たちの数は約 150 名とも言われています。

この間、ポンベはみずからの利害を超越して、ひたすら日本の医学及び医療の発展を切望し、それを実行されたとされており。このことが、私たちがポンベを深く敬愛する理

由の一つでございます。

その後、慶応元年（1865年）に長崎養生所及び医学所は精得館と改称され、さらに明治元年（1868年）には長崎府医学校と改称されています。安政 4 年のポンベの開講以来、長崎において医学教育を受けた多数の全国からの俊秀たちは、その後、日本の各地において新しい西洋医学の基礎をつくりました。

御承知のように、日本の医学は明治以降、オランダ医学の影響より次第にドイツ医学の影響を受けるようになり、さらに第二次世界大戦後はアメリカ医学の影響を強く受けるようになりましたが、ポンベによって約 130 年前に植えつけられた医学・医療の根本思想は、現在の日本の医学・医療の中に脈々として生き続けているものと確信いたします。

このように長崎大学医学部は、創立時の輝かしい栄光の時代に始まり、その後種々の変遷を経て現在に至っております。その間、幾度か危機的な状態を迎えたこともありましたが、その時々先輩の方々の御努力によってその伝統は守られてきました。特に、昭和20年 8 月には原爆によって壊滅的な打撃を受け、当時の角尾学長以下教職員、学生合わせて 892 名の方々が犠牲となられ、大学はあわや廃校かと思われたこともありましたが、角尾学長の後を継いだ古屋野学長以下の教職員、学生の方々及び同窓の方々の献身的な御努力と、国、県、市にわたる関係各位及び地域の皆様方の温かい御理解と御協力により急速に復興し、昭和32年には創立 100 周年記念式典が盛大に挙行されました。また、昭和51年には附属病院新本館が竣工し、さらに昨年10月、起工式が行われた基礎研究棟の建設は、現在順調に進行中であり、昭和65年には地上 8 階の基礎研究棟及び地上 4 階の学生棟が完成する予定です。また、教育及び研究も着々と成果を上げつつあります。

そして本日、創立 130 周年記念式典を挙行されるに至りましたことを心からお喜びするとともに、長崎大学医学部のますますの発展のために努力することの決意を新たにしますのでございます。

同窓の方々はもちろん、御来賓および関係各位のこれまでの御協力に対し心から感謝するとともに、今後のますますの温かい御理解と御支援のほどを切にお願い申し上げまして、私の式辞といたします。

3) 祝 辞 ①

文 部 大 臣 中 島 源太郎

文部大臣が所要のため出席できませんので、私、文部省高等教育局医学教育課大学病院指導室長の押田克己が代読させていただきます。

本日、ここに長崎大学医学部創立 130 周年記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

御承知のとおり長崎は、我が国にオランダより初めて西洋医学がもたらされた地であります。130年前の本日には、長崎奉行所西役所に置かれた医学伝習所において最初の講義が行われたとかがっておりますが、その記念すべき日に在日オランダ王国特命全権大使ポスチュマス・メイエス閣下の御臨席を得て、このような盛大な式典が執り行われることはまことに意義深く、関係各位におかれても感慨深いものがあることと存じます。

本医学部は、この医学伝習所に始まり、その後幾多の変遷を経て今日に至っているものであり、このような長い歴史と伝統のもとに我が国の医学・医療の進歩、発展に貢献した業績はまことに顕著なものがあります。この間、戦時中には原爆による壊滅的な被害を受けられたところではありますが、ここ長崎市とともに漸次復興され、今日の隆盛を見るに至ったわけであり、ここに至りますまでの歴代の学長、学部長を初め、地元の関係各位の御労苦に対し、改めて深く敬意を表する次第であります。

さて、近年の医学医療の発展、高度化、多様化はまことにめざましいものがあります。また、国民の健康に関する関心の高まりとともに、医学医療に対する社会の期待は極めて大きくなってきており、大学医学部においてもその適切な対応が求められているところであります。とりわけ学部教育においては、年々増加する広範かつ膨大な医学知識や技術をすべて習得するということは極めて困難になってきております。医の倫理を踏まえつつ、教育内容の精選や教育方法の改善を図ることが必要であり、生涯にわたって学習する姿勢、態度を育成することや、問題解決型の学習の重視、さらには国際化の推進など、医学教育の改善についてのさまざまな提言が寄せられているところであります。幸い本医学部がその長い歴史と伝統を踏まえ、特色ある医学教育の実施や、国際交流の積極的な推進など、内外の要請にこたえるべく教育研究活動の実践に努めておられることはまことに心強い限りであり、今後とも一層の御努力を期待する次第であります。

最後に、本医学部の光輝ある 130 年の業績をたたえとともに、教職員並びに学生諸君におかれては、本日の式典を契機として教育研究の充実発展のため一層の研鑽を積まれ、国家社会の期待にこたえられますことを切に希望してお祝いの言葉といたします。

祝 辞 ②

在日オランダ王国特命全権大使 H. C. POSTHUMUS MEYJES

IN DE LANGE GESCHIEDENIS VAN DE NEDERLANDS-JAPANESE BETREKKINGEN HEEFT DE KENNIS OMTRENT DE MEDISCHE WETENSCHAPPEN IMMER EEN VOORAANSTAANDE ROL GESPEELD.

UIT HISTORISCHE DOCUMENTEN BLIJKT DAT REEDS IN EEN VROEG STADIUM NEDERLANDSE CHIRURGIJNS, GESTATIONEERD IN JAPAN, JAPANESE ARTSEN HEBBEN VOORZIEN VAN DE KENNIS DIE ZIJ UIT HET WESTEN BIJ ZICH DROEGEN. OOK IN JAPAN ZIJN NOG VOORBEEDEN BEKEND VAN GETUIGSCHRIFTEN DIE IN HET MIDDEN VAN DE 17e EEUW DOOR NEDERLANDSE ARTSEN WERDEN VERSTREKT AAN HUN JAPANESE STUDENTEN.

DE VERTALING IN 1774 VAN ANATOMISCHE TAFELS DOOR EEN GROEP JAPANESE MEDICI VORMDE EEN MIJLPAAL IN DE GESCHIEDENIS DER JAPANESE MEDICIJNEN. DEFINITIEF WERD TOEN VASTGESTELD DAT DE WESTERSE MEDISCHE LEERBOEKEN GEBASEERD WAREN OP (VOOR DIE TIJD) CORRECTE KENNIS VAN DE STRUKTUUR VAN HET MENSELIJK LICHAAM.

EEN TWEEDE MIJLPAAL WORDT GEVORMD DOOR DE STICHTING VAN HET EERSTE WESTERSE ZIEKENHUIS, IETS MINDER DAN 200 JAAR GELEDEN NA DE VERTALING VAN HET "KAITAI SHINSHO".

HET IS DE VERDIENSTE GEWEEST VAN JHR. J.L.C. POMPE VAN MEERDERVOORT DAT DIT HOSPITAAL, DAT LATER UITGROEIDE TOT DE MEDISCHE FACULTEIT VAN DE UNIVERSITEIT VAN NAGASAKI, TOT STAND IS GEKOMEN.

ALS LID VAN HET TWEEDE NEDERLANDSE MARINE DETACHEMENT WAS POMPE VAN MEERDERVOORT IN 1857 AAN BOORD VAN DE "JAPAN" LATER "KANRIN-MARU", IN NAGASAKI AANGEKOMEN. EEN DOOR HEM OPGESTELDE NOTITIE, WAARIN DE NOODZAAK UITEEN WERD GEZET

EEN OP WESTERSE LEEST GESCHOEID ZIEKENHUIS OP TE RICHTEN,
WERD DOOR DONKER CURTIUS IN 1858 TE EDO AAN DE JAPANESE AUTORITEITEN
OVERHANDIGD.

HET SPRREKT VANZELF DAT DE TOTSTANDKOMING VAN DIT HOSPITAAL
EEN GROTE STAP VOORWAARTS BETEKENDE OP HET PAD VAN DE
MEDISCHE ZORG VOOR DE JAPANNERS.

HET DOET MIJ GENOEGEN DAT DE AUTORITEITEN VAN DE MEDISCHE
FACULTEIT VAN DEZE UNIVERSITEIT HET INITIATIEF HEBBEN GENOMEN
TOT DEZE HERDENKING, DIE WEDEROM EEN BEWIJS VORMT VOOR DE
NAUWE HISTORISCHE RELATIES TUSSEN NAGASAKI EN NEDERLAND.

GAARNE MAAK IK VAN DEZE GELEGENHEID GEBRUIK DE MEDISCHE
FACULTEIT GELUK TE WENSEN EN DAARAAN DE HOOP TE VERBINDEN
DAT DE UNIVERSITEIT VAN NAGASAKI EN MET NAME DE MEDISCHE
FACULTEIT OOK IN DE TOEKOMST MOGE BLOEIEN.

(訳 文)

在日オランダ王国特命全権大使 H. C. ポスチュマス メイエス

日蘭の交流の長い歴史の中で医学の分野の知識は常に重要な役割を持っておりました。

歴史的な文献からも、交流の早い時期に日本に滞在したオランダの医者たちが日本の医者
たちに、西洋の医学知識を伝授したことがわかります。例えば、17世紀中期にオランダの医
者が日本人の学生に免許状を与えていたことがあります。

1774年の解体新書の翻訳は、日本の医学にとって一つの画期的な出来事でありました。こ
れから以降、西洋流の医学書は人間の身体に関するそれぞれの時期なりに正確な知識のもと
に書かれるようになりました。

解体新書の翻訳後のもう一つの画期的な出来事として、200年弱前に創立された最初の洋
式病院があります。

J. L. C. ポンペ・ファン・メールデルフォールトにより、後に長崎大学医学部となったこの
病院は創立されたのです。

ポンペ・ファン・メールデルフォールトはオランダ政府派遣の第二次分遣隊の一員として、
後に咸臨丸と名付けられたヤパン号で1857年長崎に到着しました。彼は西洋式の病院を建て
る必要性を説いた書簡を書き、この手紙は江戸においてドンケル・クルチウスにより1858
年幕府に提出されました。

日本人々のための医療にとってこの病院の創立がどのように大事な一歩であるかは改め
て申し述べる必要もないことです。

大学医学部の関係者の方々の発意においてこの記念式が挙行され、長崎とオランダの密接
な関係が再びよみがえりますことは、私にとって大変嬉しいことであります。

この場をおかりしまして、長崎大学医学部にお祝いを申し上げるとともに、長崎大学、特
に医学部の御繁栄をお祈りいたします。

祝 辞 ③

長崎県知事 高 田 勇

医学部創立 130 周年おめでとうございます。

本日は知事が上京しておりますので、私、副知事の柴田芳男と申しますが、お許しをいただきまして祝辞を伝えさせていただきます。

本日、ここに長崎大学医学部創立 130 周年記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの御挨拶を申し上げます。

皆様もよく御承知のとおり、当時長崎は我が国における近代医学発祥の地であり、我が国の医学発展の歴史はまた長崎大学の歩みそのものであったと言っても過言ではありません。

長崎大学医学部は、遠く安政 4 年、我が国初めての医学伝習所として創設され、以来 130 年の長きにわたり我が国の医学の発展に先駆的役割を果たし、また医学界に多くのすぐれた人材を輩出されるなど、かがやかしい御功績を残されてきたわけでございます。さらに、この 1 世紀を越える我が国の近代化の歴史の中で、幾多の試練に遭われたにもかかわらず、これらをみごとに克服され、長崎県民はもとより広く国民医療の向上に多大なる御貢献をいただきましたことに対し、深く感謝と敬意を表する次第でございます。

特にさきの大戦では、原爆被爆により当時の長崎医科大学の施設と多くの教職員の尊い生命が一瞬にして失われるという壊滅的な打撃を受けられたのでございます。このような状況の中であって、生き残られた方々は医療従事者としての崇高な使命感に基づく不眠不休の救護活動に御従事になり、当時被爆によってうちひしがれていた市民に生きる勇気と希望を与えられました。

これらは、戦後四十数年を経た今なお、市民の間に鮮烈な印象として残っており、永遠に後世に語りつがれていくこととございましょう。現在、この点におきましては、健康で心の触れ合う社会づくりを県政推進の柱の一つとして掲げ、県民の福祉向上、健康保持を重点課題として取り組み、積極的に施策の推進を図っているところでありますが、県内唯一の医学教育研究機関としての貴学部の御指導、御援助がなくては実効を上げ得ないのであります。幸い貴学部におかれては、かねてから地域的特性を生かした熱帯医学及び原爆後障害等の研究に熱心に取り組まれ、この業績は全国的にも高い評価を得られているところでございます。どうか今後とも、長年にわたって蓄積された研究の成果と優秀な医学、医療スタッフを駆使され、県民の福祉向上のためお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、長崎大学医学部が創立 130 周年を契機として今後さらに発展を遂げられますことを御期待申し上げますとともに、関係者皆様の今後のますますの御活躍、御多幸を心から

お祈りいたしましてお祝いの言葉といたします。
どうもありがとうございました。

祝 辞 ④

長 崎 市 長 本 島 等

長崎大学医学部創立 130 周年、まことにおめでとうございます。衷心よりお祝いを申し上げます。

歴史をひもといてみますと、長崎には鎖国時代から医学に関係のある多くの外国人が参りました。16世紀半ばから19世紀半ばの明治維新までの間にかけて、宣教師であり、また外科医でもあったアルメイダ、臨床医として当時すばらしい実力を持っていたケンペル、最初の出島商館医ハッセリング、鳴滝塾を開き多くの医学者を育てたシーボルト、日本に初めて聴診器を持ってきたモーニッケ、小島養生所、医学所を開設したポンベなど、枚挙にいとまがありません。

皆様御承知のように、小島養生所、医学所をオランダ海軍の軍医であったポンベが松本良順などととも開設したのが文久元年でありまして、この医学所が医学部の前身であります。これをさかのぼること4年前の安政4年に長崎医学伝習所が設立され、ポンベはここで我が国初めての西洋医学の講義を行いました。この日11月12日が我が国において西洋医学教育が初めてスタートした記念すべき日であり、この日を長崎大学医学部の創立記念日とされている旨承っているところであります。

爾来、医学所は医学校となり、医学専門学校へと変遷を続け、大正11年公布の官立医科大学官制によって、大正12年長崎医科大学に昇格、さらに昭和24年に公布された国立学校設置法による学制改革により、同年5月31日、国立長崎大学医学部となり、現在に至りました。そして本年をもって、かがやかしい創立130周年を迎えられたのでありますが、この間の卒業生は優に八千百数十人に達し、日本有数の医学教育の府として全国にその名をはせているところであります。

しかし、この栄光の歴史の中で特に明記しておかなければならない悲しい出来事は、原爆による被災であります。昭和20年8月9日11時2分、地上の閃光は、当時医科大学学長であられた角尾晋先生を初めとし、優秀な先生並びに前途有望な学生、合わせて892名の方々の尊い人命を一瞬の中に奪い去りました。

個人のことを申しまして恐縮ですけれども、私も同じ年に高等学校を卒業した約20名の友達をこの大学で原爆で失いました。また、施設設備は壊滅的被害を受けたのであります。衷心より亡くなられた方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、この原爆の悲劇は決して忘れることなく、長く後世に伝えなければなりません。そして、世界恒久の平和を皆様とともに全世界に訴え続けなければならないと思います。

この惨劇を乗り越えて再建された医科大学は、その後当医学部となり、現在は154名の権威ある先生と103名の職員によって34講座にのぼる講義と指導が行われ、学生数は734名、毎年百数十名の人材が巣立っております。加えまして、各種の研究施設を設けて原爆後障害の研究、あるいはアフリカ、東南アジア等の発展途上国からの研修生を受け入れての熱帯医学研究など、数多くの医療研究を行い、その中心的存在として多大な成果をおさめられているところであり、長崎大学医学部の名声と業績は高く評価され、国内外に鳴り響いていると思います。

また、当医学部に併設されている附属病院は、学生の実習施設としてその能力を発揮するとともに、近代的最新設備と医療器具を備えた基幹的医療機関として患者の治療や救急医療などを行い、地域に密着した存在として住民に安堵感を与えているところでありまして、市民を代表して深甚なる謝意を表する次第であります。どうか今後も、医療の最先端を探究する由緒ある医学部として、来るべき21世紀へ向けてのより高度な医療とその体制の確立並びに次の時代を担う優秀な人材の養成になお一層の御尽力を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、長崎大学医学部をかくあらしめた先賢の御遺訓と、現在の皆様方の御努力に衷心より敬意を表しますとともに、貴医学部の今後のますますの御繁栄と皆様方の御健勝を祈念いたしまして、本日の祝辞といたします。

祝 辞 ⑤

長崎大学長 保 田 正 人

本日は、まことにおめでとうございます。

保田学長が折悪しく上京しておりまして、出席できませんでした。私、水産学部長田端義明が代読させていただきます。

本日、長崎大学医学部が創立 130 周年を迎えることができましたことはまことにめでたく、皆様とともに心からお喜びを申し上げます。本来であればこの式典に出席し、直接お祝いの言葉を述べるべきですが、折悪しく全国国立大学長会議が開催されますため上京いたしており、私にかわり代理の者より祝辞を申し上げねばならぬことを非常に残念に思う次第です。

御承知のように医学部は、その淵源をたどれば、安政 4 年 (1857 年) にポンペ・ファン・メールデルフォールト氏が開いた医学伝習所に求めることができるのであり、幾多の変遷を経ながら、その中にはあの忌まわしい原爆被爆という悲劇の歴史を含みながらも、数多くの優秀な人材を輩出し、医学界に確固たる地歩を占めながら発展、充実を遂げ、現在の隆盛を見るに至っているものであります。西洋においては数百年の歴史を有する大学は珍しくはありませんが、本邦においては、130 年もの間、綿々と続く歴史を有する大学は本学医学部を除いてはほかになく、まことに慶賀すべきものと言えます。これまでに至る先人の足跡に思いをいたすときに、私どもはその恩恵の深さと歴史の重さにさまざまな感慨を覚えるとともに、現代に生きる者としてそれを充実し、さらに未来へその成果を引き継ぐべき責務の重大さを痛感するところであります。

時あたかも、臨時教育審議会の第 4 次最終答申が提言され、医学教育の改善に関する調査研究協力者会議の審議の最終まとめが公表されたところであり、国立大学、さらには医学部に対して高等教育及び学術研究のあり方、並びに医学教育のあり方が抜本的に問われており、その改革が迫られているところであります。

私ども大学人としては、それらに対し真剣に対応し、教育研究の充実改善に意を注ぐことが肝要であります。特に医学部にあっては、近年の医学医療の急速な進歩、及び社会的要請の変化に伴い多くの課題が生じており、21 世紀に向けての医学、医療のあり方を展望しつつ、あるべき医師像という観点から医学教育の改善を検討すべき時期に來ていると、同会議では提言しております。

今後は、医学教育の質的充実を図るとともに、患者の立場に立った、患者の痛みを自分の痛みとを感じるようなよき医師の養成に十分に意を配られるとともに、教育研究及び診療の推進にさらに努力されるよう希望いたします。

長崎大学を語るとき、医学部を抜きには語れません。また、医学部を語るとき、長崎大学という冠を抜きには語ることはできません。医学部の存在は極めて偉大で突出しておりますが、本学では 7 学部のうちの一つの学部であります。総合大学としての実を上げることに留意いただくとともに、本学の最先輩の学部として、名実ともに他学部の牽引車として先頭に立って教育、研究の発展充実に範を示されることをこれからも期待しております。

長崎大学医学部がこれまでの 130 年という栄光ある伝統を礎として、さらに輝かしい歴史を築かれていくことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

祝 辞 ⑥

長崎医学同窓会長 城 谷 勝 明

母校長崎大学医学部は、1857年11月12日、ボンペ・ファン・メールデルフォールトが長崎奉行所西役所において西洋医学を開校して以来、幾多の変遷を経て130周年記念を迎えました。

これら変遷の中で最も重大であり、また悲惨な出来事は、昭和20年8月9日のあの忌まわしい原爆被災でありました。角尾晋学長を初め854名の職員、学生が殉難され、建物被災、書籍等すべてが破壊され灰塵に帰しました。しかし、母校はあらゆる困難を克服し、昭和51年、附属病院は白亜の殿堂として完成し、また近く、基礎研究棟も近代的な高層建築に生まれ変わろうとしています。

このようにして創立130周年を迎えますことは、私ども同窓の者にとりまことに喜びに絶えないところであります。また、ことは原爆被災から42年目にあたります。長崎医学同窓会におきましては、この母校の創立130周年、原爆復興40周年を記念して、記念事業を行うことを計画いたしました。

その主なものは、記念会館の建設であります。この事業は、現今の社会情勢のもとにおいて多くの困難を伴うものと思いますが、医学部発展のため、同窓各位並びに関係各位の御協力、御援助により立派に完成することを念願するものであります。

私どもは、ともすれば母校の全国に比類のない名誉ある伝統と、先輩が残された歴史的業績を忘れがちであります。この創立130周年を契機として母校と一体となり、将来に向けての新たな飛躍と発展に努めるべく心を新たにしますものであります。

4) 祝電披露

5) 記念会館目録贈呈

医学同窓記念事業会会長 城 谷 勝 明

6) 謝 辞

長崎大学医学部長 松 田 源 治

本日、長崎医学同窓記念事業会より記念会館目録の贈呈を賜り、まことにありがたく心から御礼申し上げます。ここに教職員、学生一同を代表して深甚の謝意を表するとともに、長崎大学医学部のますますの発展のために努力することの決意を述べまして、謝辞といたします。

7) 閉式の辞

長崎大学医学部附属病院長 山 邊 徹

これを持ちまして、130周年記念式典を終わります。ありがとうございました。

1) 長崎時代のポンペ

記念講演

1) 長崎時代のポンペ

国立療養所長崎病院科長 中西 啓

只今御紹介に預りました中西です。

長崎の医学開講 130 年という今までのお話に出て参りましたので、省略いたしますけれども、実はその長崎大学の創立で、なぜ長崎に公立の医学校が出来始めたのかということにも触れなければならないと思います。

まず最初に、長崎の街には、16世紀末から長崎の医学、いわゆる南蛮医学と、その当時呼んでおります医学から始まりまして、この伝統は特に外科の分野で広がっております。その関係で、内科系統のものはすべて漢方の医師である江戸あるいは京都の医師たちが、全国の医師の管理をしていた形になっております。ところが、その後、徐々に長崎の外科系統の人たちが、特別な、それまで以前の日本の医療で行われなかった医療の方向を伝えて来たことから、南蛮外科系統の人たちが、江戸あるいは京都にも拡がって参りました。その関係で、長崎にはやはりオランダの医方が固定するまでの間、いろいろと南蛮医学の系統が残っておりますけれども、それは後の禁教令によって、いわゆる隠れキリシタンに移った形になります。隠れキリシタンと申しますが、現在は潜伏キリシタンと申します。この潜伏キリシタンたちは古い時代の医療を伝えておったことが昭和初期まで確認されております。ところが、それも潜伏する形のものであって、正式の医学教育は実際には、例えば塾の形式を持って開かれていたわけです。

塾の形式は、長崎では古い時代には、西、あるいは栗崎そのほか、数軒ございますが、そういう南蛮医学時代からの塾であったわけで、それが引き続いてオランダ医学の時代になりましても、オランダ医学を学習した医師たちが改めて学習塾を作ることになるわけです。特に江戸時代は、非常に厳しく、長崎以外の処には外国船が入らない時期が 200 年以上も続いておりました関係で、殆んどの人たちは、全国の洋学、蘭学を学ぶ人たちはすべて長崎に来て、出島に出入りすることを望んでいたわけであります。

そういう形で、出島には前から、いわゆる VOC 職員のための健康管理の医師たちが、ずっと常勤しておりました。そのうちの数名は非常に熱心に日本の研究をしたり、あるいはヨーロッパ医学を紹介したりで関わって来ておりました。代表的な人物として、17世紀の終りにやって来ましたケンペル、あるいは次の約80年後にやって来ましたツェンペリーと、さらにツェンペリーの著書を見て、日本にやって来たシーボルトという順番で、いわゆるヨーロッパから時代の変遷に従った新しい医学を伝えるとともに、日本からのいろんな資料をヨーロッパに伝える固定した観念が出来始めておりました。

ところが、幕末期になりますと、19世紀の初期から外国の船、特に黒船事件と申しますが、アメリカ、あるいはヨーロッパ諸国の色々な威嚇、あるいはその他の開国問題が出て来ました。そこで、シーボルトの草案による開国勧告で、日本自身がオランダの勧めによりまして、海軍伝習を始めるわけです。

その海軍伝習が始まり、第一次伝習と申しますが、これが先ほど一寸お話に出ましたように、1855年から2年間は、それまで長崎出島の商館医として居りましたファン・デン・ブルックが科学担当で、医学を教えているわけです。その次の第2次海軍伝習にポンペがやって来たことになります。ポンペは2年後の1857年からやって来ました。長崎で開講したのはその年の11月12日でありました。この会場の入口のところに、写真がいろいろ並べてございますので、御覧になってお出でになったと思います。

その長崎の医学校が始まりますには、やはり形を整えねばならず、関係者は随分と苦労しなければならなかったわけです。特に、最初は4人くらいの学生で、直接名前のはっきりしている人が居りました。松本良順という幕医に養子になりました佐藤泰然の子息が、いわゆる幕医として長崎にやって来て、長崎の医学校、海軍伝習所の付属の医学伝習所で、現在の県庁の場所ですけれども、その当時の長崎奉行所西役所で講義を始めることになります。最初のときは12名とも、また13名とも言われて居りますが、実は外人接待所が長崎奉行所の西役所の中にございます。その当時のオランダ人たちが接待される場所は、法規上明らかにその接待所でなければ、ほかのところには居れません。その場所は余り大きくない場所でございますので、結局は最初12名の、あるいは13名の受講者がいたにしても、それが後に学生がふえて、結局は場所が狭いということで、近くに場所を求めることになります。これはその当時の町年寄でありました高島秋帆の自宅で、入口から入ってすぐ右側に小さな2階建ての小家がありました、その小家を求めてそこで医学校、医学伝習を続けることになります。

そこで講義を始めておりますうちに、実はその翌年ですが、非常に困った問題が起ります。長崎の港に入って来たアメリカの船ミシシッピ号が、真性コレラを広域に伝染させてしまうことになります。この時点で、ポンペは非常に困難な事態に直面するわけです。コレラ対策問題で大変苦慮するわけですが、松本良順とともに相談して、次々とその対策を進めます。特にポンペは、最初から長崎に医学教育の場と附属病院を求めておりましたが、なかなかそれが幕府に聞き入れられないのです。ただ、その当時の長崎奉行岡部長常は、非常に深く洋学に理解があった人でした。こういう幕末期の非常に硬直した行政の人たちが多い時代に、岡部長常がいたことは非常に立派なポンペの業績を伸ばされることに関わって来ます。

岡部長常は、ポンペと非常に親しく、家族の診療もみずから受けさせることもやっておるわけですが、長崎の街中でポンペに対する信用問題が問われるわけです。長崎の街では、まず最初に、外国人に治療を受ける風習はある程度固定して居ったにしても、幕末期は特に尊王攘夷の論議が盛んな時期でした。そのためにポンペによつての医学教育自体もいろいろと論じられて居りますし、また解剖が開講の翌年に行われたときにも、非常に物見高な

見物人がいますし、佐幕派の人たちあるいは開国派の人たちという二派の争いが医学教育の現場にも及んでくることさえ起りました。解剖の実習を始めるに当って、警備隊を沢山置かなければならない社会情勢だったわけです。

そういう問題がありまして、丁度ポンペの時代は幕末期の非常に大変な時期だったことは忘れてはならないと思います。ただ、ポンペが先ず最初に講義をし始めたと申しましたが、そのときに学生に対してどんな風に当たったかをお話しなければならないと思います。まず学生にいろいろと質問してみると、自分が話をしている問題がなかなか理解されない。特に学生たちはオランダ語をいろいろ勉強しているけれども、それが十分に通じない問題がありました。それをさらに進めて行く方法を考えて、彼自身ものに日本語の勉強を始めることになりますが、実際に講義を通訳したのはオランダ通詞西慶太郎と若い石橋政方でした。彼のそばについて翻訳しますが、残念ながらその翻訳が少し間違っていることにポンペ自身、気がつきまして、彼自身がオランダ語の講義準備のほかに日本語の勉強にも励むわけです。

そういう意味で、ポンペの講義を十分理解し得る人が当時の長崎医学校の学生の中にいたかどうか、ということが先ず問われなければならないと思います。有名な蘭学者として知られた学生も何人かはいます。その蘭学者の門人中に十分オランダ語の会話を理解できた人として司馬凌海と山口舜海、この人は実はのちに佐藤尚中と改めた人ですが、佐藤泰然の養子になった人です。泰然は佐倉藩医でシーボルト門人ですが、松本良順の父であります。尚中のノートはあとで御覧に入れますが、ポンペの内科と外科の講義録を非常に綿密に書き残しました。当時、オランダ語の学習を十分にやっていた学生がポンペ門下生として育っていたことは忘れられないと思います。スライドをお願いします。



—春徳寺アルメイダ記念碑—

春徳寺のアルメイダ記念碑は最初に長崎医学の歴史の中で、外科の話を致しましたが、外科医として日本に来た人がルイス・デ・アルメイダです。1552年香料貿易で、1555年にカトリックになり、その普及に努めますが、はじめて外科を伝えた最初の西洋医師です。

本渡のアルメイダ記念碑は1583年に天草上津浦で修道院長として亡くなりましたので、熊本県医師会が日本で最初にアルメイダの記念碑を天草の本渡殉教公園に建てられました。

春徳寺セミナリオ、コレジオ趾碑は春徳寺中庭にある故古屋野宏平学長筆の記念碑で、キリシタン時代にあった学校の記念碑です。

オランダ船は1600年にリーフデ号が豊後に漂着したのを契機として、日蘭交渉が始まりますが、鎖国時代、ヨーロッパの国として唯一つの貿易国となり、約200年余りの交渉が続きます。1641年、平戸から長崎の出島に移されましたオランダ東インド会社は鎖国の期間中、関係を保ちました。出島は長崎の岬の先にポルトガル人追放のために築かれた人工島で、築島、島、または出島と呼ばれます。

モンタヌスの紹介した出島図は世界に初めて出島の存在を示しますが、モンタヌスはジャワに来て他の人から話を聞いて描いたため当時の現状とは異っているものです。出島の手前の部分は既に江戸町の家とその手前の丘にはのちに奉行所となった建物があった筈です。オランダ船は初期に帆船、ポンペの来たときは外輪船ですが、医学の話に戻ります。

ご承知のように、ヴェザリウスの解剖書はルネッサンス期の16世紀から人体解剖が行われたことを示します。それ以前はガレノスの解剖学が教会医学の教科書でした。ブタの解剖による心臓を3室とする説が守られていました。フランスのパリで活躍した外科医アンブロアス・パレは床屋外科出身で、「外科全書」を出版し、外科学を確立します。パレ外科書は20ヶ国以上の外国語に翻訳されました。ヴェザリウスと同じ時代の人ですが、日本に伝えられたのは1660年代に出島のカピタンがオランダ語訳本を献呈し、江戸城に保管されます。江戸城では余り利用されず、後年、吉宗が紅葉山文庫で発見し、何の本かを質問します。日本の医学研究史では大きなウェイトを持ったものとなります。

1700年ころオランダ通詞榎林鎮山はパレ外科書を得て翻訳し、「紅毛外科宗伝」を著わします。1689年にホフマンから鎮山に贈られ、1706年に完訳して貝原益軒の序を得ます。現在、本学図書館に残されています。

少し省略しますが、洋学解禁で、1720年以後、オランダ本の翻訳が積極化し、オランダ通詞吉雄耕牛の吉雄流外科と前の榎林流が西洋医学を受容しました。チュンベリーの渡来は1775年ですが、江戸参府時には日夜、宿舎の長崎屋に解体新書グループから質問責めにあいます。江戸蘭学指導者の吉雄耕牛は「解体新書」の序文を書きました。自宅にオランダ部屋を作って留学生にチンダ・アラキの酒を出したり、洋食を出して蘭学生を鼓舞します。このため寛政の改革のとき、別の理由で閉門を命ぜられますが、外国船の渡来が頻繁になり、他の通詞も困るので、早目に閉門を解除され、通詞目付に任ぜられます。丁度、彼の閉門中、江戸の大槻、宇田川一派が「重訂解体新書」を出し、耕牛の序文を除いて、前の訳に誤りがあると

も付記しています。

チュンベリーは帰国後、ウプサラ大学長となりますが、長崎のオランダ通詞たちと連絡をとり続けていました。チュンベリーと直接連絡して日本に来たシーボルトは1823年に長崎に着き、前後約7年間、医学および外交を指導しました。医学講義録は伝書として沢山残っていますので、当時の診断と治療が明らかにできます。

ヴェルツブルクにシーボルト胸像があり、ミュンヘンに墓碑があります。シーボルトは日本に来るとき、日本人の好みそうな新しい医療器具を準備しましたので、留学生が沢山集まって来ます。

ナポレオン戦争後、貿易が低迷していたオランダはシーボルトに二重国籍を与えて日本に派遣し、自然科学調査官を兼ねさせた商館

医として多大の援助をします。特にヨーロッパの学会は日本の食糧調査を求めています。これは当時、ヨーロッパの人口増加による食糧不足が深刻化していたからです。

ヴェルツブルクのシーボルト胸像ができるとき、日本にも募金を求めますが、シーボルトに直接交渉のあった諸大名や門人、長崎病院勤務者全員が寄付の集めに応じました。

胸像完成後、募金の主旨と応募者の人名簿が諏訪公園下の長崎県立図書館入口右側に記念碑として建てられています。

ヴェルツブルクの胸像の台石には日本人を中国人の姿として彫刻され、同時にシーボルトの持ち帰った動植物が刻み込んであります。ライデン大学の校庭の池にはシーボルトの持ち帰ったサンショウウオが生き継いでいますが、同時に移植されたツタは大学の壁に茂っています。サンショウウオはヴェルツブルクの胸像の台座にも刻み込まれていました。

シーボルトは渡来当初、天然痘（痘瘡）予防接種、つまり牛痘法の手技を伝えますが、持参したウィーン製ワクチンが腐敗していたため、感作しませんでした。しかし門人榎林宗建は1848年渡来の商館医ゲルンハルト・オットー・モーニケに中国伝来の人痘法の乾燥痘瘡法を応用することを提案しました。改めてバタビアから牛痘接種により生じた痘瘡を乾燥させたものを取り寄せまして牛痘法を成功させます。WHOは、先年痘瘡の絶滅宣言を出しましたが、シーボルトが牛痘法の手技を伝えたのがもとで、日本では早期に牛痘法に関心を持たれ、普及したのです。

シーボルトはミュンヘンで1866年に亡くなりますが、墓は日本の宝篋印塔の形を模倣して



—ミュンヘンのシーボルト墓碑—

いて、日本研究家と刻まれ、別の面に中庸の言葉「強哉疆」の3字が刻まれています。

シーボルトは医療器具のセットを持参しましたが、産科、外科のほかにガルバニ電池、脈台などの診断用器具と歯科器具も持ち渡っています。日本の歯科医学史の教科書では、横浜の近代歯科学が主流として記載されますが、西欧の歯科学は江戸時代から長崎を経由して移入されていました。

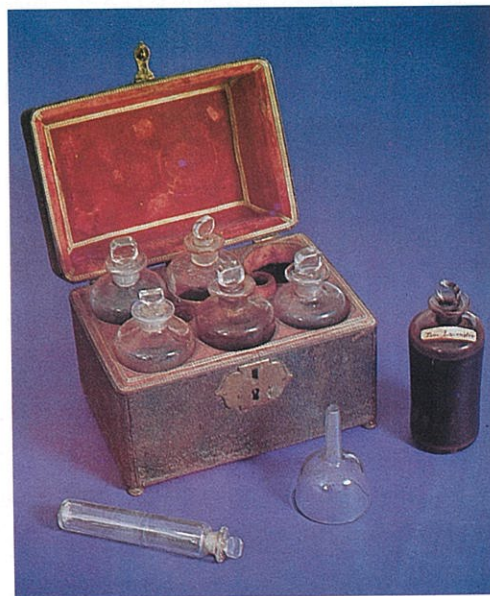
シーボルト帰国後、商館医オットー・モーニケが来たとき、聴胸器を持参していました、この聴胸器はフランスのラエンネが発明したのですが、最初の型のもので、現在、長崎大学医学部図書館に保管されています。故角尾晋学長はこの聴胸器が最初の型であることを確認されました。明治維新直後、長崎府医学校執事を勤めた吉雄圭斎の寄贈です。

1855年、勝海舟らの海軍伝習が長崎で始められますが、オランダおよびロシアの開国勧告状はシーボルトの草案によるものでした。その自筆草案は、現在もオランダのハーグ、ソ連のレニングラードに残されています。

1857年、第2次海軍伝習が始まったとき、オランダ海軍軍医リディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メルデルフォルトが咸臨丸に乗って来ました。日本最初のお雇外国人医師で、国立医学校の創立者であります。



—シーボルト娘 楠本イネ(左)・タカー—



—楠本家伝来 シーボルト医療器具—

ポンペは長崎に来るため、パリの紙型解剖模型を購入し、学生の医学研究の便宜を計ろうとします。もちろん解剖ができれば、それに越したことはありませんので、渡来の翌年に西坂刑場で処刑された死刑者の解剖を行います。現在のNHKの上の刑場地で解剖が行われました。そこには本蓮寺が管理する慰霊所がありましたが、実際に解剖するときは、尊皇攘夷の議論が盛んな時代だけに、奉行所では大変厳重な警備を致します。排斥すべき外国人が指導して日本人の死体解剖するわけですから、物凄い反対を表明する人もいたのです。カッテングダイケは当時を記録しますが、シーボルトの娘イネも解剖を見学したようです。

ポンペ渡来の翌年ですから、この解剖と同じ年ですが、アメリカ船ミシシッピ号が広東經由で長崎に入港し、コレラの大流行が起ります。いわゆるコロリ騒動です。日本中に伝染して多数の死亡者を出しましたが、当時、まだ細菌学が確立していませんので、コレラの原因は明らかでなく、治療法、予防法についてポンペは意見を述べます。これを長崎奉行所は公開しますが、ポンペはドイツの医学者ヴンデルリッヒの初期の治療法を示していたのです。大阪の緒方洪庵は、コレラの経過の中期以後の治療法の不足を補うことになりますが、予防法では食事療法に注意を与え、現在ではコレラ類似の症状を示す腸炎ビブリオ菌の好発する食品を含めて注意していたわけです。

スライド有難うございました。

実は、ポンペが長崎に来てからコレラ騒動は非常に困難な仕事だったわけですが、これをきっかけにポンペ自身の病院建設の要請が幕府に受け入れられます。コレラの流行時には多数の患者を狭いところに収容して治療しなければならなかったもので、高島秋帆の家の入口の2階建の小者部屋には、あまり大きな部屋はありませんでした。2階に学生たちが住んでいて、1階に診療室があったことを長与専斎は記録していますが、その専斎の記録「松香私志」によれば、ポンペの教育の厳しさが伺えます。この本は最近、復刻されていますので、ご覧になった方も居られるかと思います。長与家のご子孫の方でも、ポンペの話は現在まで、十分に云い伝えられていました。お孫さんの話では「ポンペの厳しい教育を十分に守って行くように」ということでした。

ポンペ在日当時、実際に化学の考え方をみますと、ポンペ自身「日本における五年間」の中に回想して居りますが、化学の教育に非常に困ったということでもあります。

渡来当初の医学開講時の入学試験のときのことで、最初の入学者の入学試験で、日本人学生の化学についての考え方が十分ではないと云って居ります。この化学の知識、考え方は、物理学を含めていってありますが、当時の学生たちが十分に理解できないことを非常に悩んでいたわけですが、化学の歴史を振り返ってみますと、当時の化学の知識としての元素の数を考えてみることにしましょう。ポンペの次に長崎にやって来たボードウィン分析究理所、つまり物理化学研究所を建て、ハラタマを呼びます。その講義ノートでは元素数は61となっています。ラボアジエが化学の元素数を発表しましたときは33ですから、結局は丁度倍くらいになっている時期の化学の元素数の知識の時代です。

実際に化学の歴史から申しますと、現在は100を越えているわけですから、全くその元素数の問題だけを考えても、違いがございます。非常に科学的な教育をヨーロッパ側で始めたのは1830年のオーギュスト・コントの実証主義哲学の発表以後であります。ポンペも、その科学主義的な教育を受けて居るわけであります。結論としては、それ以前の日本に伝えられておった医学の教育方法とは、すっかり変わった医学教育の方法を彼が伝え始めました。いわゆる基礎医学教育から始めまして、その後、臨床医学教育に及ぶ問題の教育になるわけです。

医学教育の改革というのは、このポンペによって初めて日本で行われたと云えます。その意味で長崎で始められた長崎の医学校は、近代医学の発祥の場と云えるわけです。実際に、それ以前、シーボルトなどの有名な人がいますけれども、それよりも彼の科学的な教育方針が非常に豊かに稔って、現在に至っていると云えると思います。

明治以後になって、いわゆる漢方の医療を無視する形になりますけれども、それ以前の漢方の教育は、非常に徹底した江戸側と、長崎側とは全く違って居たことが明らかであります。特に多紀家が中心になって居りました幕末期の医学行政は、実際に西洋医学の書物を読んではならないという江戸漢方の考え方があります。長崎の漢方の人たちは、漢方の医者であると同時に、西洋医学も勉強しようという意志を持って居ります。

実は、長崎県内で医師となって、治療の修業をした人の履歴書が残って居ります。これは漢方医がどういう風に西洋医学を修めたかという外科医の記録であります。実際に、長崎の街では、そういう風習、つまり長崎の医学教育のあり方は江戸と違って居りました。明治維新後、長崎の漢方医の子息が東京に出まして、医学の勉強をしようとしたとき、漢方医の門に入って塾に行ってみると、鴨居に個条書があって、「西洋医学の書物はすべて間違っているからそれを読んではならない」という項目が入っていたそうです。それを見た長崎からの医学生はびっくりしまして、父親にあてた手紙を残して居ります。岡田家ですが、岡田家に残って居りました資料で、明治13年(1880)ですけれども、多紀家の門流の漢方医の塾では明治以後もそれを守っていたことが判ります。

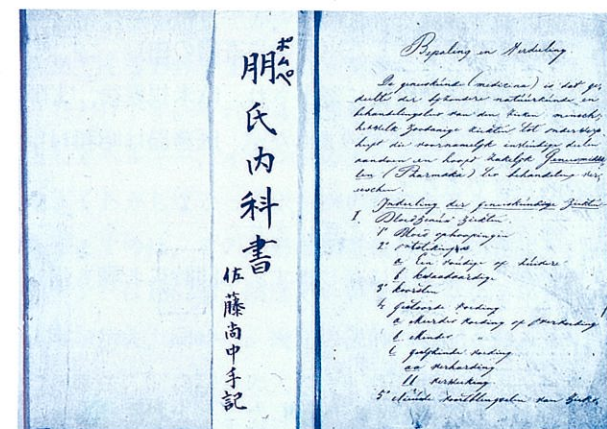
そういう意味で、長崎の側の漢方医の人たちはヨーロッパの医学と一緒に勉強することが常識となっていたわけです。実は、ポンペは漢方の医療について、「日本における五年間」の中に書いています。彼自身は、漢方の理論は全くわからないこと、いわゆるその当時のヨーロッパの理論ではわからないことを明らかにしているわけであります。そういう意味で、いろいろと彼なりに日本の医療についても勉強して居りまして、針の打ち方とかその他のことを紹介して居るわけでもありますけれども、実際には、彼自身はそれを十分に理解できなかったことがわかります。

スライドをお願いします。

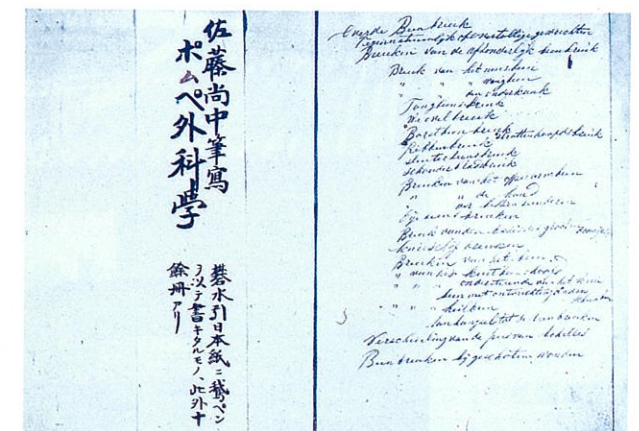
幕末期の医師の写真ですが、当時の医師で坊主頭に剃った方が官医です。ライデンの写真にあるように、坊主頭がいますが、長崎医学校の学生も坊主頭の官医がいるわけです。御承



—ポンペとその学生たち(前列坐せるはポンペと松本良順 荒瀬進氏所蔵)—



—ポンペ内科講義録(佐藤尚中) 千葉大学医学部蔵—



—ポンペ外科講義録(佐藤尚中) 千葉大学医学部蔵—

知のように、松本良順も長崎留学時代は坊主頭であります。

明治以後の医師の履歴書を御覧に入れますが、漢方の修業から外科を勉強するのに、洋法と云ってあります。長崎の修業者の履歴で、大村領内の河野家の資料です。

ここで、ポンペ門人佐藤尚中の講義ノートをスライドしました。全部オランダ語で講義されているのを、オランダ語で書き写して居ります。佐藤尚中は当時、山口舜海と云いますが、佐倉順天堂の佐藤泰然の養子となった人です。泰然はシーボルト門人で、その子が松本家に入って松本良順となったため、尚中を養子としたわけです。尚中は維新後、東京に出て東京順天堂を創立しました。現在の順天堂大学がその伝統を継いでいるわけです。

尚中のポンペ講義録は内科学、外科学の分のすべてをオランダ語で筆記しています。ポンペは、尚中のことを外科の天才と称しています。日本語訳講義録は、沢山残され、現在も各地にあり、本学図書館にも資料室に残っています。オランダ語を完全に理解しながらノートを取ったことが明らかで、当時の学生の語学力を知る資料の一つです。

最後にポンペの要請で小島に建設された養生所はトローエンの設計ですが、H型の病院の西側の東南端に退院前の患者のリハビリテーション室が設けられているトローエン自筆の蘭文設計図を先程、医学部長室でレメリンさんから見せて頂きましたが、設計図では、医局、薬局をはじめ、教室、病室の配置がすべて記載されていました（本学に寄贈の由）。

ポンペ門人大村藩医長と専斎は明治維新後に長崎医学校長に選出され、欧米視察後、文部省医務局（のち内務省）を創立、万年医務局長として生涯を終りましたが、医務局は昭和14年、厚生省となったわけで、日本の医療制度の創立者であります。

以上で私のお話を終わりたいと思います。御清聴ありがとうございました。

この記念式典の特別講演にお招き頂きましたことを光栄に存じます。と同時に聴き頂いた皆様に厚く御礼を申し上げます。

追記。本文は講演のテープレコードを再生したものに若干、加筆したことをお断りする。



—長与専斎旧宅(大村国立長崎中央病院内)—

2) 帰国後のポンペ

法政大学教授 宮 永 孝

ただいま医学部長から御紹介をいただきました法政大学の宮永です。

さきに中西先生の「長崎時代のポンペ」に続きまして「帰国後のポンペ」について、時間の許す限りお話ししたいと思います。

私は、日欧東西交渉史といいますが、殊に幕末の日蘭関係に今興味を持っておりまして、多少自分でも調べるし、また、多少ものも書いているものがございますけれども、実を言いますとポンペの名を知ったのはつい最近と申しますか、4、5年前のことです。それまでは特別にポンペに注意を払ったことも、また、深く極めたこともありませんでした。たまたま私が、4、5年前のことですけれども、幕府が初めて海外に派遣しました留学生、オランダ留学生といいますが、そのことに興味を持ちまして調べているうちにポンペの名がちらちら出てくるわけです。それが契機になりまして、もう少しポンペについて深く極めたいと思ったわけです。それで4、5年前の夏休みに、2ヵ月ほどありますんで、その機会を利用してベルギー、オランダの方へ出かけまして、大方の協力を得まして、何とか帰国後、従来よくわからなかったポンペの動静を多少つかんできたわけです。きょう、これからお話ししますのは、そのいわば調査報告といいますが、それに類した話であります。

ポンペは1862年、陰暦でいいますと文久2年に当たりますが、その初頭、帰国したい旨を幕府に伝え、同時に、後任の医師の手配を頼みます。同年の秋、10月、後任のボードウィン、これはこの記念講堂の入りまして、写真がポンペと並んでかかっております。あれがボードウィンでございますが、ボードウィンがやってまいります。それでポンペは帰国に先立ちまして、自分が長崎滞在中に集めましたコレクション、具体的にはどういうものかということとははっきりわかりませんが、恐らく和装、地図、木版画、それから原稿、メモの類だったと思います。その数は、『オランダ医学雑誌』によりますと、木箱に詰めたものが18箱、また、ポンペの後任としてやってまいりましたボードウィンの書簡によりますと木箱で8箱あったということですが、そういった自分が集めましたものをカリブソ号という船に積み込みます。

ちょうど同じ時期に幕府はオランダへ留学生を15名ばかり派遣するわけですが、そもそもこれが幕府が海外に留学生を派遣した最初であります。

幕末に、幕府は、欧州列強の仲間入りをするにはまず海軍を強化し、かつその拡張が急務であると考えまして、とりあえずアメリカに軍艦を3隻注文するわけです。あわせて海軍の練習生を派遣しまして、建造に立ち会わせていろいろ学ばせようということを送るわけです。

が、ちょうど折あしくアメリカでは南北戦争が勃発いたしまして、アメリカ側より、もう日本の注文に応じられないといったふうに謝絶してくるわけでありました。そこで急遽幕府としては、オランダに依頼するわけです。とりあえず軍艦を1隻発注するわけです。これはドルレヒトのヒップ・エン・ゾーレンという造船所で造られるわけですが、後に「開陽丸」と命名される、我が国としては最初の洋式軍艦であります。この船は、後年、日本に回航されまして、戊辰戦争の折に江差沖であえなく座礁沈没いたします。それはもう後のことでありますが、その先ほど申しましたカリプソ号にポンペはコレクションを積み込みます。

いずれにせよポンペは1862年11月1日、これは陽暦であります。和暦の文久2年9月10日に当たりますが、午前10時にヤコブ・エン・アンナという260トンの船に乗り込みます。当日、出島あるいは大浦居留地の外国人などの、あるいは長崎奉行所の役人などの見送りを受けます。途中、上海とかシンガポールを経てスエズ、アレクサンドリア、そしてマルセイユ等を経まして、それから陸路オランダ本国に帰るわけです。国に到着しましたのは大晦日であります。つまり1862年12月31日のことであります。5年ぶりに帰国しましたポンペはすぐ何をしたかということはよくわからないんですが、恐らく父や兄弟、姉妹らが当時住んでおりましたハーグ郊外、フォールスハウテンのラオコーフというところに大きな館といいますか、立派な家があったので、恐らくそこで休養をとり、また、疲れを癒したところでハーグへ出かけまして関係各省を訪ねて日本滞在中の報告をしたものと思います。また、恐らく友人、知人とも会ったことでしょう。先ほどちょっと触れましたオランダ留学生一行15名、これは海軍班、洋学班、それから医学班と、これは士分であります。侍であります。それから職方だと称して技術者、鍛冶屋、船大工、水夫などもおりますけれども、こういった職方が一緒に参加しております。その一行15名がオランダのブラーウェルス・ハーフェンという小さな港町がありますが、そこに到着したのは1863年、文久3年に当たりますけれども、陽暦の6月2日のことであります。この留学生はロッテルダム、それからハーグを経てライデンに入るわけです。ライデンのプレーストラートにありますホテル・ド・ハウデンゾーン、俗に簡単にホテル・ド・ゾーンと言っておりますが、そこで旅装を解くわけです。

先年、私がオランダ留学生の本を書きましたとき、たしかプレーストラートの二十三番地とか、今の美術店が当時のホテル跡と書いた記憶がありますが、あれは実をいいますと間違いでありまして、この機会に訂正したいのでございますけれども、現在ライデンにある市長舎から2、300メートル先にあります。たしか今は洋品店と思いますが、そこがホテル・ド・ハウデン・ゾーンの跡であります。今の番地でいいますと155番地に当たります。建物は健在です。

このホテル・ド・ゾーンに旅装を解いたのは6月4日。ポンペは当時何をしていたかといいますと、軍医のままハーグ市スパイ1番地という所に住んでいたようであります。日本の海軍留学生、オランダ留学生であります。これがオランダに到着したことによりまして、ポンペは海軍大臣のカッテンディーケ、これは第2次オランダ海軍教育班の団長としてポンペ

らを引き連れて長崎にやってきた人ではありますが、その当時既に国へ帰って海軍大臣を務めておりました。このカッテンディーケの命を受けまして世話役兼教師となるわけであります。ポンペが、かつての教え子もいる日本人留学生と再会し、あるいは初めて会ったのは6月6日の昼どきのことであります。このときは、留学生の研修科目、何を勉強するかを選定、それからどこで修行するか、勉強するか、それについて同じように日本人係を仰せつかったライデン大学の東洋学の先生でホフマン教授がいるわけですが、これとポンペとがいろいろ議論するわけですが、ポンペは、海軍諸術その他を学ぶんだったらハーグがいいだろうという意見であります。一方、ホフマンは、いや、勉強するならライデンに限ると。なかなか意見相容れないわけですが、そのときは多少激しい議論もして、両者は分かれます。

このホフマン教授はドイツ人です。シーボルトと同じく今の西ドイツのヴュルツブルクで生まれております。後年、シーボルトの助手となりましていろいろ手助けするわけですが、日本語はほとんど独学で字引だけを頼りに勉強して、読み書きを身につけた、いわば篤学の士でもあります。

6月11日、ポンペは再びライデンにやってまいります。このときは、海軍大臣になったカッテンディーケの意見書を携えております。このときに、先ほど申しました職方一同、5名おりましたけれども、それから洋学班に所属します津田真一郎、西周、これら2人、計7名ほどはライデンにとどまりまして、その他の士分の者、侍はハーグに移りましてめいめい専門とする科目を学ぶことになるのです。

6月13日、2日後ですね、ポンペは士分の者を3名連れましてハーグに赴いております。これはどうしてわかるかといいますと、6月15日付のライデン新聞に小さいながらも記事が出ております。これは先年マイクロフィルムで送ってきてもらったものを、また、私がオランダへ行ったときに採取したものを、ちょっと放ったらかしてあったんですが、昨年並びにことしの夏、おぼつかない語学力ながら、辞書を引ながらちょっと解説しましたんですが、その新聞に出てまいります。日本人3名連れてハーグに行ったというような記事でありますけれども、日本人3名が果たしてだれとだれとだれなのか、不明であります。恐らくこれは留学生の下宿探し、あるいは下宿の下見ではなかったかと思います。

オランダ留学生の団長は、幕臣で千五百石の旗本の養子に行きました内田恒次郎、後年明治期に入りまして地理の方で活躍して有名になる人ですが、その内田恒次郎以下士分の者らは6月15日にライデンを引き払ってハーグに移動しております。

ポンペは、日本人留学生にいろいろ教えるわけですが、その科目もおおよそわかっております。まず、数学、化学、物理などを取り締まりである団長の内田の下宿、または自分の家、私宅で教えております。しかし、長期間教えたわけじゃなくて、その期間はせいぜい1年ほどであったと思います。休講が多いです。ポンペは。どういうわけだか、ちょいちょい休講しております。それは後でちょっと理由がわかるんですが、ありますけれども。

それから翌1864年、ポンペが帰りました翌年のことですが、陰暦でいいますと元治元年に当たりますけれども、その9月の中旬から10月上旬にかけてポンペは、留学生の取り締まりである内田、それから当時造船学を勉強してました赤松らと視察旅行に出かけております。1週間ほどポンペはイギリスに滞在したと思います。

当時のオランダからイギリスに渡る方法でありますけれども、殊にロンドンへ行く方法でありますけれども、やはりロッテルダムから船が出てたわけで、内田、赤松、ポンペら3名はまずハーグから汽車に乗りましてロッテルダムに出ます。そのロッテルダムのマース河岸ドゥ・ボームピエスの船着き場からロンドン行きの船に乗るわけであります。

今日、オランダからイギリスに渡るにはいろいろルートがありますが、例えばフック・ファン・ホーラントと申しまして、ロッテルダムの西27キロにあります港町からは午前11時ごろ汽船が出ております。午前11時に船に乗って、対岸のイギリスのハイチに着くのは大体7時ごろであったと思います。料金は、円にしまして2等が7,000円、1等が9,000円ぐらいだったでしょうか。私は先年船に乗りまして、非常に船酔いした思い出があるんですけども。

このマース河岸から出発しまして、当時の船賃ですけれども、赤松によりますと、3人で3ポンド15シリングであったと言っております。ロンドンに滞在したのは、ポンペは先ほど申しましたように1週間ほどして、恐らく内田あるいは赤松らは英語があまり得意じゃありませんから、ポンペの仕事は恐らくその通訳兼案内業であったと思いますけれども、そのロンドン滞在中に彼らはセントポール寺院とか、ケンジングトンの博物館、あるいはクリスタル・パレス、これはジョゼフ・カストン卿の設計による建物で、ガラスと鉄でできた建物であります。1854年に開館しております。

このポンペ、内田、赤松らはこのクリスタル・パレスで食事をしております。またお酒も飲んでおります。例えばグロック酒、水で割ったリキュールでありますけれども、それから苦みビール、ワインなども飲んでおります。ポンペらのあとから榎本釜次郎、後の武揚ですけれども、それとクーフルデンというオランダ人が一緒にまたロンドンにやってきます。これと入れかわりにポンペはオランダに帰るわけであります。

1864年11月（元治元年）のことですけれども、ポンペは15年に及ぶ海軍軍医の生活にいいよピリオドを打ちます。同年12月、ブレダに住む姪のヘンリエット・ヨハンナ・ルイーザ・ド・ムーラン、これはお手元の写真のコピーの2枚目にある、その立っている若い女性の写真がそうであります。当時、ド・ムーランは19歳、これと結婚いたします。ポンペは当時35歳であります。翌、和暦でいいますと慶応元年に当たりますが、長男が誕生いたします。ヨハン・ヨセフ・ウィレム、後にこれは弁護士となります。それから慶応2年（1866）5月、ポンペ夫婦はブレダという町からハーグに移りまして、今のハーグの中央駅のそばにありましたベルビュー・ホテルの裏手で医院を開きます。和暦でいいますと慶応2年で、この年は非常にコレラが流行した年でありまして、ポンペは長崎時代の経験を大いに生かしました。開

業医となつてからのポンペは、オランダ赤十字のハーグ委員会の会員として活躍いたします。翌、慶応3年10月、次男が生まれます。アンリ・ジャン・アントワヌといいますけれども、これは後に海軍大尉となります。そして、この年ポンペにとって記念すべきこととして、日本滞在中の回想録といいますが、『日本における5年間』という本が刊行されまして、翌年、下巻が出ます。

ちょっと話はそれますけれども、この『日本における5年間』という本は今なかなか古書でも高い本でございまして、25万から30万、あるいは35万円ほどいたします。私は、オランダにいる日本人の方から、オークションで落としたものを帰り際におみやげにもらってきたんですけども、今となったら宝物みたいに大事にしておるんですけども、しかし、内容がよく読めませんもので、しかし、これは幸い翻訳が出ておりまして、雄松堂から沼田次郎という先生と荒瀬進というお医者の方の共訳の形で出ておりますから、お読みになればかなり面白い本かと思ひます。日本の部分だけが訳されております。

それから慶応3年から明治7年にかけて、ポンペはハーグのデ・ウィッテ・クラブの理事を務めております。デ・ウィッテ・クラブと申しますのは、ハーグのほぼ中央に位置するところにヘット・プレイン、広場と訳せましょうか、そのヘット・プレインの周辺が官庁になっておりますけれども、そのヘット・プレインの一角にこのデ・ウィッテ・クラブが今日もあります。立派な建物でして、最近、一部分再建しておりますが、その正面を入りまして、階段を上って右手の壁に、理事としてのポンペの名前が刻まれております。

明治元年、1868年11月に長女が生まれております。この年、ハーグでオランダ赤十字主催の医療機器の展示会が開かれたわけですが、このときポンペは委員として活躍するわけですが、日本式の浴槽、風呂桶ですね、これを個人出品して銀賞を受けております。明治3年から4年にかけて、いわゆる普仏戦争があるわけですが、このときポンペはオランダの医療班を率いましてザールブリュッケン、フランクフルトの南西に位置する町ですが、その野戦病院に勤務いたしまして傷病兵の看護と治療に日夜献身しております。そのときの奉仕活動は、オランダ本国でもそうであります、プロシア、フランス、ポルトガルの認めるところとなりまして、後年、いろんな賞を受けております。それから明治5年から7年



—ポンペ夫人(19歳頃のもの)—
(ヨハンナ・ルイーザ・ド・ムーラン)

にかけて、ポンペは医師のままハーグ市の市会議員となりまして、かたわら従来どおりデ・ウィッテ・クラブの理事を務めております。殊に、ポンペはハーグの市会議員在任中、スヘベニンゲンと申しまして、ハーグの郊外にある海岸保養地ではありますが、その海水浴場あるいは市内の病院の監督官を務めております。

明治4年、これはちょっと日本の使節のことを触れたいんですが、明治4年11月10日、右大臣岩倉具視を全權大使といたします遣欧使節団、俗に岩倉使節団と申ししますが、これが欧米に向けて横浜を出帆いたします。この使節の使命と申しますのは、目的といましようか、幕末に結んだ条約締盟国を歴訪いたしまして明治維新政府の国書を奉呈して条約改正のための予備交渉をいたしまして、あわせて欧米先進諸国の諸制度と、文物等を調査研究することにあつたようであります。

日本を發った使節団はまず横浜よりアメリカに行くわけですが、それよりイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、プロシアと合わせて12ヵ国ばかりを巡歴して、1年10ヵ月後の明治6年9月に帰国するわけであります。この岩倉使節団がオランダに滞在いたしましたのは明治6年2月24日から3月7日までの約12日間であります。この間、使節一行は、『米欧回覧実記』などには出てきませんが、オランダ側の資料から判明いたしますけれども、ハーグのホテル・コーレというホテルに滞在いたします。このホテルは現存いたしません。オランダ滞在中、使節は、ロッテルダムの汽船会社、オランダ蒸気船会社あるいはライデンの王立古代博物館、人類学博物館、ハーグの外務省、海軍省、王宮、それからプリンス・マウリッツ博物館といったようなところ、あるいはまた、アムステルダムの王宮美術館、それからクリスタル・パレス、これはオランダにもクリスタル・パレスがありましたが、ベリディカーの『ベルギー・オランダ』という旅行案内記によりますと、1910年代のものですけれども、まだあつたようであります。今はありません。それから有名なダイヤモンドの研磨工場、これはアムステルダムの市内を流れるアムステルの河畔にあつて、有名なコスターという人の研磨工場を廻りましたけれども、そこを訪ねております。

それから、アウティスと呼ばれるアムステルダムの動物園、それから北海運河の工事現場、それからオランダ銀行、同商事会社、あるいはトレスリング石版印刷会社、それからハーグ郊外の、先ほど申しました、海岸保養地であるスヘベニンゲン、それからホールスホーテンの王立オランダ銀器製造工場など、こういった工場をよく見て廻っております。岩倉使節団の前に文久年間に竹内下野守一行の文久遣欧使節団がオランダを訪れていますが、この使節が訪ねたのと同じような場所を岩倉使節団も訪れているわけです。

このときポンペはライデン大学のホフマン博士とともに日本人掛となりまして、一行をライデンに案内しております。岩倉使節団がオランダ滞在中、ポンペはずっと付き添っていたわけではありません。恐らく1日から2日ぐらいの付き合いだったろうと思います。

2月28日に日本使節は馬車に分乗いたしましてハーグのボスという森の中を通ってライデンに遊覧に出かけておりますけれども、このときの模様はアムステルダム新聞に1873年3月

3日号に報じられております。どんなことを書いてあるかといいますと、「日本使節は本日ポンペ・ファン・メーデルフォールト医師を伴い馬車でライデンへ遊覧に出かけ、当地にある幾つかの王立施設、コレクション及びその他の珍しいものを見学した後、午後、ハーグに帰ってきた」というような記事であります。

ポンペは、使節一行の世話役でもあつたわけですが、実をいいますと、主治医も兼ねていたことがオランダ新聞に出ております。ロッテルダム新聞の73年2月26日にはこんな記事が出ております。前文を省略いたしますが、「私たちの市民ポンペ・ファン・メーデルフォールト医師は、使節がハーグに滞在する間主治医を務めるであろう」と、こう出ております。岩倉使節団がオランダを出る3日前のことです。3月4日に当たりますけれども、ポンペは自宅で夜会を開きまして使節の主だったものを自宅に招待しております。これは新聞に出ております。例えばアムステルダム新聞3月7日付にこんなふうに出ております。「昨日、グラーフ・ファン・ポールスブルック、(これは幕末に横浜の駐日公使を務めました人でありますが) グラフ・ファン・ポールスブルック氏が敬意を表して私宅において催した晩餐会に出席した。日本使節の面々はその後、日本で医師を務めたポンペ・ファン・メーデルフォールト氏の家での夜会に臨んだ」と、こうあります。

続いて、明治7年3月10日のことでもありますけれども、元オランダ留学生であつた榎本武揚、明治政府に仕えまして偉くなっております。海軍中将兼特命全權公使としてロシア公使館在勤を命じられました。3月10日のこの日の朝、彼は随員とともに横浜を出航いたしまして、香港、アレクサンドリア、ベニス、フランス、オランダ、プロシアを経まして6月10日ごろ任地のペテルスブルクに到着いたしました。榎本の特命といひますのは、樺太の領土問題の解決が主なものでありましたが、このときポンペは榎本より、外交顧問になってほしいと懇望されまして、それに就いております。この外交顧問就任の話は岩倉具視を通じて話があつたようであります。ポンペはこの依頼を受けますと早速オランダの国王ウィレム3世に許可を求めるわけであります。7月14日付をもって彼は勅令によりまして晴れて日本政府の顧問に就任するわけであります。ロシア外務省の方には、日本公使館付の嘱託医兼學術調査官というふうに届け出たようであります。

ポンペの仕事は、当時、日本とロシア側とのやりとりはフランス語で主にやつたようではありますが、ポンペは非常に語学も堪能な人でありまして、フランス語の翻訳あるいは会談の席での通訳だったと思います。ポンペはペテルスブルクに向かうわけではありますが、8月4日に単身、家族を残しましてまず自分だけが汽車でハーグを發ちまして、プロシアのリューベックを訪問いたします。途中、オズナブルック、ハンブルクでそれぞれ1泊いたしまして、8月8日の夜にリューベックよりレバ号という貨客船に乗ってドイツを離れます。この船はレバリー、現在のターリン、それからクロンシュタットを経まして8月の13日ペテルスブルクに到着するわけであります。ちょうどハーグを發ちまして10日になりましょうか、のことです。船着き場には、ポンペはペテルスブルク到着後の第1報を故国にいる父親に手紙で報告しているわけではありますが、それによりますと、榎本武揚と書記官が埠頭に

出迎えていたと言っております。その書記官の名前ははっきりわかりませんが、恐らく1等書記官の花房義質^{よししげ}、2等書記官の中村博愛^{ひろあき}らであったろうと思います。これはアメリカ人の研究家でレンセンという人がいますが、その人が在外公使館、日本関係のそれをリストアップしたのがあります。それをちょっと参考にいたしました。

当時、日本公使館は、ユニコフというロシア人の大邸宅を借りて使ってたようであります。ポンペは榎本らと一緒に住まずに、借家に住んだようであります。妻と3人の子供、そして家庭教師2名はポンペと同じような経路を通りまして一足遅れてペテルスブルクにやってくるわけであります。

ポンペは、日本大使館の顧問として活躍したのは約2ヵ年ほどでありまして、明治9年の夏にはハーグに戻ってまいります。ハーグのジャバストラートというところに来ます。やがてここを引き払いましてベルヘン・オブ・ゾーム、ロッテルダムの南71キロあたりに位置するところがありますが、そこに住みましてまた医院を開業いたします。

ポンペには弟がおりまして、その弟は、名前をいいますとヨゼフス・レオナルドス・ヘンドリックスという弟がおるんですけれども、この弟はカキの養殖を始めた草分け的な人間であったわけですが、1871年に39歳で若死しております。ポンペは、医院を閉じますと弟の事業を引き継ぎまして、カキ養殖に携わるようになるわけであります。そのときポンペの年齢は50歳であります。明治14年にはカキを調査のためにフランスなどにも行っておりますし、また、この年には論文も書いております。「スヘルデ河及びゼーラント海における漁業報告」といったようなもの、それからカキの養殖に関する論文などを発表しております。

明治16年11月、ポンペは勅令によりましてオランダ赤十字協会中央委員会の会員に選ばれて、これは1893年まで続いております。それから翌明治17年でありまして、9月1日から6日まで、スイスのジュネーブで第3回赤十字国際会議が開かれたんですが、このときポンペはオランダ代表として出席しております。翌、明治18年8月、ポンペはゼーラント漁業組合の会員に選ばれております。この明治18年という年にアントワープでベルギーの赤十字の万国博覧会が開かれたわけですが、このときポンペは副審査委員長を務めております。その功によりまして彼は銅メダルを贈られております。さらに明治の18年から22年にかけて、彼はベルヘン・オブ・ゾームの商工会議所の会員でもあったわけですが、後に会頭に就任しております。

明治21年のことあります。9月20日から27日にかけて約1週間、第4回国際赤十字会議がドイツの南西部にありますカールスルーエというところで開かれましたが、日本も前年の6月に国際赤十字条約、ジュネーブ条約に加入しておりましたから、今回初めて代表団を派遣いたしました。日本側からは石黒忠憲^{ただのり}、これは子爵枢密院顧問でもあります。この人は若いころポンペの講義録を手で写しながら勉強した人でもあります。通訳として森林太郎、森鷗外^{そうがい}が同行しております。開会2日目の9月22日に、森鷗外が、会場であります議事場を出てホテルに帰ろうといたしますと、非常に白髪紅顔の大男が近づいてまいりまして、「私は

オランダ赤十字代表のポンペである」と名乗るわけであります。このときはお互いに簡単に自己紹介、世間話をした程度にすぎませんけれども、森鷗外の目にはポンペはまるで阿羅漢のように映ったようであります。森鷗外のドイツ日記にちょこっと出てまいります。それから、長崎時代に自分の手足となってよく尽くしてくれました松本良順、これは初代の軍医総監でもあります。松本良順の消息を尋ねております。

9月25日はちょうど日曜日に当たっておりまして、この日は会議はありません。主催者側の招待によりまして各国代表は特別列車に乗りましてバーデンバーデンという保養地に遊覧に出かけます。帰途、ポンペと鷗外はたまたま同じコンパートメントで顔を合は合わせます。このとき面白い話が出てくるわけですが、オランダ留学生の医学班から参加しておりました林研海、後の2代目の軍医総監になる男ですが、明治期になりまして、その林研海のことを話題になるわけあります。ポンペが言うには、「森さん、あなたの顔を見ていると、林研海の顔を思い出す」というわけであります。その林研海は、在蘭中に女性問題を起こしまして、その急場を救ったのがポンペだということなのであります。これも森鷗外のドイツ日記に少し出てまいります。

明治26年9月のことありますが、ポンペ夫妻はベルヘン・オブ・ゾームよりベルギーのブリュッセルに移ります。明治26年という年を境に、このポンペ夫婦は生活地が定まらぬままあちこち転々とするわけであります。文字どおりさまよえるオランダ人といひましょうか、ベルギー、オランダ、ドイツ国内を転々とするわけであります。明治29年から35年にかけてポンペ夫婦はベルギーのニューポルトというところに住んでおります。これはブリュッセルの西北西約130キロのところの位置する小さな静かな港町であります。そこで暮らすわけあります。この間に3度ばかり住所を変えております。住民登録票によりまして、職業が出ておりまして、不労所得者となっております。この町で恐らく年金受給者として暮らす一方、ひょっとすると、多少ともカキの養殖に従事していたかも知れません。ニューポルトで6年ばかり暮らしましたポンペは再びオランダに戻ります。明治35年、ハーグ市のクンラードカーデというところにしばらく暮らします。このときの職業は実業家というふうになっております。また、正確な日時はわからないんですが、この年の7月ごろ、ポンペ夫婦はハーグを引き払って、翌明治36年9月ごろまでロッテルダム郊外のマーススライスというところで暮らしております。

ポンペは、ロッテルダム郊外のマーススライスに移る前に、実をいいますと、肥料工場をつくらうといたしまして、マーススライスの市当局に何度も請願書を出しておりますが、結局、この肥料工場設立は実現しなかったようであります。

それから明治36年の秋9月のことありますが、ポンペ夫婦はマーススライスをあとにいたしまして、またハーグに戻ってまいります。明治37年8月、ポンペ夫婦はハーグを引き払いましてドイツに行きます。ハンブルク郊外のバンツベックのラートハウスマルクト15番地というところに住むわけですが、ここが大変気に入ったようで、あたりの景色も建物もいいというようなことを手紙の中に触れております。このドイツのハンブルクで暮らし

ましたのもわずかな期間でありまして、再びオランダに戻っております。明治38年から翌39年までの1年ほど、ポンペ夫婦はアーペルドールンというところに移っております。これはアムステルダムの東90キロぐらいのところであります。このときの職業は医師となっておりますわけであります。この年、ポンペの年齢は77歳であります。現役の医師としてはちょっといささか高齢すぎる感もありますが、住民登録票によりますと家政婦を2名雇っておりますから、あるいは医院を開いていたのかもしれません。

明治39年7月、ポンペ夫婦はこのアーペルドールンを引き払いまして、以前暮らしたことのあるベルギーの、先ほど申しましたニューポールトに舞い戻りました。ここで暮らしたのはほんの20日ばかりでありまして、また、ここを引き払って、今度はベルギーのブリュッ

セルのシャルル・マルテル26番地に身を落ち着けるわけであります。これはお手元の写真のコピーの2枚目にその当時暮らしていた家の写真のコピーがあります。文字どおりシャルル・マルテル26番地がポンペの終焉の地となるわけであります。このシャルル・マルテル界限といいますのは、恐らく当時も今も変わらないと思うんですが、いわゆる下層中産階級の人たちが主に住んでいるようなところであります。非常に陰気臭いような感じを受けます。

明治41年(1908)10月3日午前11時半ごろのことではありますが、ポンペは遂に息を引き取るわけであります。享年79歳であります。3日後、柩を馬車に乗せましてブリュッセル郊外のブリュッセル墓地に運ばれるわけであります。その30区に埋葬されるわけではありますが、ポンペの埋葬された30区というのは実を言いますと3級の墓地であります。1級、2級、3級の墓地であります。その区画の土地を求めたのはポンペの妻であります。

オランダ、ベルギーに共通しているのは、まず埋葬に先立って土地を買います。5年、10年、15年、20年、30年、50年と、最高50年がぎりぎりのところだと思います。その5年なら5年の土地の権利を買いますと、5年間だけは墓籍その他は保証されるわけであります。それが過ぎますと、保証されないわけであります。今は、ポンペの30区の埋葬されたところは目印となるものは何もありません。ただ、2番目の写真のコピーにありますように、芝生のただの原っぱであります。3,000坪ぐらいありまじょうか、30区のところは。

それから、ポンペの子孫と会った日本人もかなりの数になりますけれども、大正2年1月、



—ポンペ終えんの地、
シャルル・マルテル26番地—
(ブリュッセル)

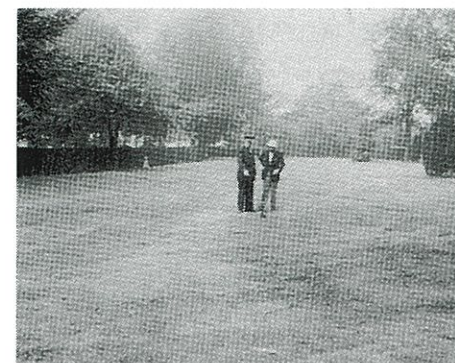
医学博士の入沢達吉、有名な医師であります
が、この方は、ポンペの弟子であります入沢
恭平の子息であります。この入沢博士がハー
グにしばらく滞在しました折に、ポンペの甥
とかポンペの妹と会っております。そのとき
にポンペにまつわる話をいろいろ聞くわけ
であります、その妹などが語るところによ
りますと、ポンペは晩年に、事業の思惑が外
れて、親類などにも少なからず迷惑を
かけたということであります。したがって、自然
親類付き合いも疎遠になったということであ

ります。殊にボンペがベルヘン・オブ・ゾームにおりました1890年という年は、カキ養殖に失敗しているわけであります。なぜかといいますと、その年は長い間海水の低温が続いたからでもあります。

一つ解けない謎として、ポンペが晩年にあれほど頻繁に住まいを変えたということであり
ます。一つには、借金取りから逃れるためではなかったかとも推測されます。特に、資料的
に明らかになりますのは、明治24年から25年にかけて、彼は財政困難に陥っているよう
であります。

最後に、ポンペ未亡人の動向であります。婦人は、夫を亡くした翌年（明治42年）、4月3日よりブリュッセル墓地に比較的に近いスハイエバークに移ります。大正2年2月にそこからわずかに離れたジョーゼ・ブラン街148番地に引っ越しております。これらの家はともに健在であります。ポンペ未亡人がいつごろブリュッセルからハーグに移ったものかはよくわからないんですが、夫の死から7年後の1915年5月3日（大正4年）、ハーグで70年の生涯を閉じております。ポンペ夫人のなきがらは5月6日にハーグのローマカトリック教会墓地に葬られております。これもポンペと同じように3級の墓地に葬られております。この墓地を買ったのは長男である弁護士 のヨハン・ヨセフ・ウィルヘルムであります。当時の金で60フロリン出して求めております。ポンペ夫人の墓石は既に取り除かれて、何もありません。ポンペと同じように、目印となるものは何もないわけであります。2メートルぐらいの墓穴の一番底に埋まっていると管理事務所の職員が私を案内してくれて、ゆび指してくれました。したがって、ポンペもそうでありますけれども、ポンペの上には少なくとも2体ないし3体、ポンペ夫人の上にも2体ないし3体埋まっているはずであります。

我が国に近代医学を初めて体系的に教授したという点でポンペは前任者と大きな相違をつくっていると思いますが、帰国後、医学教育や研究とは無縁に近い人になりまして、むしろ実業家として暮らしたわけであります。しばらくの間、開業医としても暮らしましたんですが、それもわずかな期間でありまして、医学的に一番貢献するところが大きかったのは赤十



—正面,人が立って
いる所がポンペの埋葬地。
(ブリュッセル墓地)

字関係の仕事に携わったことではなかったかと思います。医師のままハーグの市会議員となりましたり、また、榎本武揚の外交顧問となって日露の外交に尽くしたり、政治畑も歩いておりますが、それも短い期間であります。むしろ実業家・カキの養殖者として活躍した期間が長く、帰国後のポンペの生活を特徴づけているのはまさにこれではないかと思います。しかし、事業の方は期待に反しまして振るわず、彼の晩年は不遇であったと思います。不労所得者としてわずかな年金で生活を立てていたわけであります。この未亡人が3級の墓地を求め、そこに夫を埋葬せざるを得なかったというようなことも、何か夫婦の晩年の暮らしぶりを暗示しているように思えてなりません。

非常に煩雑でおわかりにくい点多々あったと思いますが、私の話はこれで終わりといたします。

ポンペ関係年譜

- 1439 (永享11) ヤン・ピーテルス・ポンペ生れる。
- 1587 (天正15) ラウコープのポンペ館を再建する。
- 1797 (寛政9) ヨハン・アントワヌ・ポンペ・ファン・メールデルフォールト生れる (日本^①のポンペ^②の父)。
- 1803 (享和3) ヨハンナ・ウェルヘルミナ・ヘンドリカ・ド・ムーラン生れる (日本^①のポンペ^②の母)。
- 1816 (文化13) ポンペの通訳、西慶太郎 (直方) 生まれる。
- 1825 (文政8) ベルナルド・ディーデリック・ファン・トロイエン (長崎養生所の設計者) 生まれる。
- 1829 (文政12) ヨハネス・リディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メールデルフォールト (日本^①のポンペ^②)、ブリュージュで生まれる。
- 1830 (天保1) ベルギー、ネーデルランドより独立。
- 1831 (天保2) ヘオルフ・インデルマウル (看護兵、ポンペの助手) 生れる。
- 1844 (弘化1) 6月、ヘンリエッテ・ヨハンナ・ルイーゼ・ド・ムーラン (ポンペの妻) 生れる。
- 1845 (弘化2) ポンペの父、アムステルダムの連隊に勤務する。
7月、ポンペ、勅裁によりユトレヒトの国立陸軍軍医学校に入学を許可される。
9月、見習生となる。
- 1849 (嘉永2) 8月、ポンペ、国立陸軍軍医学校を卒業し、三等軍医として哨艦スヘルデに勤務を命じられる。
- 1850 (嘉永3) 3月、輸送船プリンス・ウィルレム・フレデリック・ヘンドリックに転属を命じられる。
- 1851 (嘉永4) 1月、哨艦スヘルデに戻る。
3月、蒸気艦メラピに転属する。
11月、パーク船 (船名不詳) に転属を命じられる。
- 1855 (安政2) 4月、コルベット艦 (船名不詳) に転属を命じられる。
5月、コルベット艦ボレアスに転属を命じられる。
7月、ベルス・ライケン中佐の率いる第一次海軍教育班の来朝。
11月、ポンペ、外地勤務を終えて帰国。ニューディーブの海軍病院に勤務する。
- 1856 (安政3) 2月、海軍病院を辞す。
8月、昇進試験に合格し、2等軍医となる。ヘレフトスライス (軍港) の哨艦に勤務する。
- 1857 (安政4) 2月、哨艦勤務を解かれる。
3月、カッテンディーケ少佐の率いる第二次海軍教育班の一員として、ヤパン号にて日本に向けて出発。

- 5月, 下田条約を結ぶ。
- 9月, 同教育班長崎に到着。ポンペ, 1ヵ月間ほどヤパン号内で暮らす。
- 10月, 第一次海軍教育班, アルマ・ディグナ号にて帰途につく。
- 11月, ポンペ, 西役所の一室において, 医学生を前に就任の講演を行なう。
- 12月, 教場を大村町の高島秋帆邸に移す。第二次海軍教育班の隊員, 上等水兵J. ステッケレンブルフ, 一等水兵M. J. H. ダーデレル病死。ポンペ公開の種痘を行なう。
- 1858 (安政5) 1月, 出島のオランダ弁務官ドンケル・クルチウス, オランダ人と日本人通詞らを招いて新年の午饗会を催す。
- 4月, カッテンディーケ, ポンペ, ハルデス, トローイエン, 勝麟太郎, 矢田堀景蔵, 松本良順および伝習生らヤパン号で平戸, 長崎, 鹿児島を訪問。
- 5月, 一行は長崎に帰着。
- 7月, 日蘭・日露・日英修好通商条約を結ぶ。ブチャーチン提督麾下の戦艦アスコルド長崎に入港, のち下田に向かう。シナより長崎にコレラ侵入。
- 8月, 台風により出島の蘭館にも被害が出る。コレラ猛威をふるう。
- 9月, ポンペに解剖実習の許可おりる。日仏修好通商条約を結ぶ。
- 10月, オランダよりエド号 (のちの朝陽丸) 長崎に入港。
- 11月, オランダよりナガサキ号 (のちの電流丸) 長崎に入港。カッテンディーケ, トローイエン, ポンペ, ヴィッヘルス, 木村図書, 勝麟太郎, 松本良順および伝習生ら, 福岡, 博多を訪問。『天然痘および種痘法の書』を出島で印刷・刊行。
- 1859 (安政6) 1月, 外国船の長崎入港増える。
- 3月, 出島に火災が発生, 建物の4分の1を焼失。
- 海軍伝習所閉鎖の旨, 告げられる。
- 5月, 蒸気艦バリ号, 長崎に入港。
- 7月, ポンペ宅, 空巢に入られる。
- 8月, コレラ発生する。看護兵G. インデルマウル, コレラ撲滅に尽す。シーボルト, 息子を連れて再来日。
- 9月, ポンペ西坂の丘にて死体解剖を行なう。
- 11月, カッテンディーケの率いる第二次海軍教育班, 帰国の途につく。ポンペ, ハルデス残留。「1858年より1859年に至る出島における医務報告」を『蘭領東インド医学雑誌』に掲載。『1858年出島において行われた気象観測』を出島で印刷・刊行。「日本における自然科学の研究について」を『王立アジア協会北シナ支部雑誌』に掲載。
- 3月, 目安方・寺崎助一郎と橋本良之進, 「病院取建掛」に任命される。
- 1860 (万延1) 4月, 香港のジョージ・スミス主教, 長崎を訪れ, ポンペの講義を参観する。
- 6月, ポンペと松本良順, ロシア水夫のために検海を行なう。「日本の一罪因の解剖」を『王立アジア協会北シナ支部雑誌』に掲載。
- 1861 (文久1) 2月, ポンペ, 松本良順, 佐藤尚中ら牛頭と眼を解剖。

- 3月, ポンペの母死去す。
- 8月, 養生所と医学所完成する。
- 9月, 開院式を行なう。
- 1862 (文久2) 1月, ポンペ, 帰国したい旨を幕府に伝える。
- 9月, 「和蘭行御軍艦方」(オランダ留学生) らを乗せた咸臨丸 (ヤパン号), 江戸より長崎に来る。
- 10月, ポンペの後任アントニウス F. ボードウィン長崎に到着する。ポンペ, 61名の門下生に修了証書 (ディプロマ) を出す。
- 11月, ポンペ, 商船ヤコブ・エン・アンナ号に搭乗し, 帰国の途につく。オランダ留学生らを乗せたカリップソ号長崎を出港。
- 12月, ポンペ, オランダに到着。『薬学入門』を出島で印刷・刊行。
- 1863 (文久3) 6月, オランダ留学生一行, ブラーウェルスハーフェンに到着。ポンペ, 一行の世話役兼教師となる。
- 1864 (元治1) 「1860年より1861年に至る日本における医務報告」を『蘭領東インド医学雑誌』に掲載。「ヤママユの飼育入門」「シナおよび日本の蚕のヨーロッパ渡来」を『風土順化動物学会紀要』に掲載。
- 6月, 分析窮理所の着工。
- 11月, ポンペ, 海軍軍医を辞して一般市民となる。
- 12月, ポンペ, ヘンリエット・ヨハンナ・ルイーズ・ド・ムーランと結婚する。
- 1865 (慶応1) ユトレヒトの国立陸軍軍医学校, アムステルダムに移転する。
- 11月, ポンペの長男, ヨハン・ヨゼフ・ウィルヘルム生れる。分析窮理所完成。ボードウィンの後任マンスフェルトの来朝。養生所を精得館と改称する。
- 1866 (慶応2) 5月, ポンペ夫妻, プレダのヒンネケンよりハーグに移る。
- 1867 (慶応3) ポンペの回想録『日本における5年間』第1巻, ライデンで出版される。
- 10月, ポンペの次男, アンリ・ジャン・アントワヌ生れる。ポンペ, 「デ・ウィッテ・クラブ」の理事となる。
- 1868 (明治1) 長与専斎, 精得館の頭取となる。
- 『日本における5年間』第2巻出版される。
- 10月, 精得館, 長崎府医学校と改称される。
- 11月, ポンペの長女, リディア・マリア・カロリナ生れる。
- 1869 (明治2) 長崎府医学校, 長崎県医学校と改称される。
- 1870 (明治3) 長崎県医学校, 大学所轄となる。ポンペ, ヴィーラ・ヴィコサの無原罪のお宿りポルトガル騎士章を授与される。
- 7月, 普仏戦争起こる。ポンペ, オランダの医療班を率いてザールブリュッケンに赴く。
- 12月, 長崎県病院, 長崎医学校と改称される。
- 1871 (明治4) 7月, ポンペ, 青銅十字章を授与される。
- 12月, ポンペ, アニマ・ウルネイラトルム・クラマウィット記念章を授与される。

- 岩倉使節団、欧米に向けて横浜を出港。
- 1872 (明治5) 2月, ポンペ, ハーグの市会議員となる。スヘベニンゲンの海水浴場および市内の病院の監督官を兼任。
5月, クラウン十字章4等を授与される。
- 1873 (明治6) 2月, ポンペ, 岩倉使節団をハーグよりライデンに案内する。
9月, 岩倉使節団帰国する。
- 1874 (明治7) 7月, 戦争記念鉄十字章を授与される。ウィルLEM 3世の勅命により, 日本政府の外交顧問に就任する。
8月, ハーグを出発, ロシアのペテルスブルグに向かう。
9月, ポンペの父, ラウコープの家で死去。
- 1875 (明治8) 養生所の頃の寄宿舎, 梅毒病院に提供される。
9月, ロシア皇帝アレクサンドル2世より, セント・スタニスラウ2等騎士章を授与される。
- 1876 (明治9) 6月, 長崎病院医学所が開設される。
盛夏, ロシアよりハーグに戻る。やがてベルヘン・オブ・ゾームに移る。
- 1877 (明治10) 旧養生所の寄宿舎を取りこわす。
- 1878 (明治11) 1月, 長崎病院医学所, 三たび長崎医学校と改称される。
10月, ポンペの長崎時代の通詞・西慶太郎死去す。
- 1879 (明治12) 1月, 長崎医学校, 県立長崎医学校となる。
12月, 日本政府より勲四等旭日小綬章を贈られる。
- 1881 (明治14) 9月, R. J. フェルスホール・ファン・ニッセと共に, フランスにカキの調査研究に赴く。
- 1883 (明治16) 県立長崎医学校, 長崎 (県立甲種) 医学校となる。
11月, ポンペ, 勅令により, オランダ赤十字協会中央委員会会員となる。
- 1884 (明治17) 9月, 第3回国際赤十字会議にオランダ代表として出席する。
- 1885 (明治18) 2月, ファン・トロイエン, ユトレヒトで死去する。
8月, ポンペ, 大蔵大臣の推薦により, スヘルデおよびゼーラント漁業組合の会員に選出される。
同年, ベルヘン・オブ・ゾームの商工会議所の会員となり, のち会頭に就任。
- 1887 (明治20) 9月, 第4回国際赤十字会議にオランダ代表として出席。この時, 石黒忠恵, 森鷗外らと会う。
- 1888 (明治21) 3月, 長崎 (県立甲種) 医学校は廃止され, 第五高等学校医学部となる。
- 1893 (明治26) 9月, ポンペ夫妻, ベルヘン・オブ・ゾームよりベルギーのブリュッセルに移る。
- 1894 (明治27) 4月, ポンペ夫妻, ベルギーのニューボルトに住む。
9月, 第五高等学校は第五高等学校医学部となる。
- 1901 (明治34) 3月, 第五高等学校医学部は長崎医学専門学校と改称される。
- 1902 (明治35) 6月, ポンペ夫妻, ハーグに移る。
7月, ハーグを引き払い, マーススライスに移る。

- 肥料工場を作る計画であったが頓挫する。
- 1903 (明治36) 9月, ポンペ夫妻, マーススライスよりハーグに移る。
- 1904 (明治37) 8月, ポンペ夫妻, ドイツのハンブルクに移る。
- 1905 (明治38) 6月, ポンペ夫妻, オランダに戻り, アーベルドールンに住む。
7月, ベルギーのニューボルトに移る。
- 1906 (明治39) 7月, ポンペ夫妻, ニューボルトを引き上げ, ベルギーのブリュッセルに移る。
- 1908 (明治41) 10月, ポンペ, ブリュッセルのシャルル・マルテル26番地で死去。行年79歳。
- 1909 (明治42) 4月, ポンペ未亡人, ブリュッセルのスハエルベーク, エルネスト・ロード街23番地に移る。
- 1913 (大正2) 1月, 医学博士・入沢達吉, ポンペの甥と妹に会う。
2月, ポンペ未亡人, ジョゼフ・ブラン148番地に移る。
- 1914 (大正3) 7月, 第一次世界大戦始まる。
- 1915 (大正4) 5月, ポンペ未亡人, ハーグにおいて死去。行年70歳。
- 1923 (大正12) 3月, 長崎医学専門学校は廃止となり, 長崎医科大学が設置される。
- 1925 (大正14) 10月, ポンペの長男, ヨハン・ヨゼフ・ウィルLEM・ボンペ・ファン・メールデルフォールト死去。
- 1929 (昭和4) 5月, ポンペ生誕百年の講演会が開催される。
- 1944 (昭和19) ポンペの次男, アンリ・ジャン・アントワヌ・ボンペ・ファン・メールデルフォールト死去する。
- 1949 (昭和24) 5月, 長崎医科大学は長崎大学に包括される。
- 1950 (昭和25) 6月, 分析窮理所の建物取りこわす。
- 1957 (昭和32) 11月, 長崎大学医学部百周年および西洋医学教育発祥百年記念式典が挙行され, ポンペ記念碑の除幕式が行なわれる。
- 1961 (昭和36) 3月, 『長崎医学百年史』刊行される。
- 1974 (昭和49) フォールスホーテンに一部分残っていたボンペ館が取りこわされる。
- 1987 (昭和62) 11月, 長崎大学医学部創立130周年記念式典が挙行される。

3) ヨーロッパ状勢 から見たポンペ

日蘭学会常務理事 ウィレム・レメリンク

ただいま御紹介を受けました日蘭学会のウィレム・レメリンクです。

1851年10月18日、オランダ商人 Van Assendelft de Coningh は、長崎奉行を辞任する人とその後任者の訪問を受けました。その二人の役人のために、大通詞 志築竜太が長い挨拶をしました。Van Assendelft de Coningh は、その挨拶を受けた後、礼儀正しくお辞儀をしたものの、その間“一体、どう返事をすれば良いか”を一生懸命考えていました。すぐに大通詞は彼にオランダ語で、ゆっくりと1～50まで数えていれば、それを通訳し、お礼を述べると伝えました。

Van Assendelft de Coningh は、色々身振り手振りをまじえ、又、奉行達や大通詞の方を交互に見ながら、ゆっくりと1～50まで数えました。大通詞は、注意深く聴きながら時々“えええ”とか“いいい”等相づちを打ちながら、彼が何を言っているか忘れないように又、理解している様子を示しました。数をかぞえ終えた時、大通詞はもっともらしく咳払いをしながら、丁寧なお礼の挨拶をしました。もちろんこの挨拶は、奉行達のために儀礼的に作られたものであったけれども、Van Assendelft de Coningh は奉行達の反応を見てこの返礼挨拶がとっても良く出来た事を知ったので、この通訳が正しかったことを強調するために、また礼儀正しくお辞儀をしました。

今日ここに、おみえに成っている皆様達は、この講演を求められた時、私がすぐに“やります”と答えた事が理解できるでしょう。と言うのは、私もただ1～50または100まで数えていれば、長崎の通訳の方が、皆様方に Pompe について全て通訳し伝えて下さると思ったからです。ところが、残念ながら時代は変わっており、この講演依頼の返事をした後で、私が日本語がわかるので通訳はいませんと伝えられたのです。この事は、私が自分自身で話さなければならず、又、もっと重要な事は、Dr. Jhr. Johannes Lydius Catharinus Pompe van Meedervoort について改めて少し調べなければいけないということでした。もちろん、彼の名前は知っており、また彼が日本での西洋医学を伝える事に力を尽くしたことも知っていましたが、彼がどういう人かと言う事や、彼の日本での仕事上の問題等は、深く研究したことはありませんでした。けれども、今回私がそれをしなければならなかった事を本当に意義のある事だと嬉しく受け止めております。西洋、特にオランダでは、Pompe およびその後来日した Dr. Bauduin, Dr. Gratama, 技術者の Van Doorn, De Rijke 等の業績はそれ

程重要ではないと考えています。彼らは単に仕事をして、給料を得ただけです。オランダでは、日本人が彼らに対して非常に敬意を表していることに驚いています。例えば、彼らの銅像を建てたり、オランダにお墓を作ったりする事です。しかし、この事は「先生を尊敬する」と言う日本人の習慣であるので、私達西洋人は、あまり気になりません。けれども、Pompe について色々のことを読めば読むだけ、実はこの様なオランダ人の態度が誤りであることがわかります。例えば、Pompe がオランダで受けた教育のおかげでも、日本に紹介した医学は、当時の日本にきわめて適切なものであったとしても、また努力が十分受け入れられやすい状態にあったとしても、やはりこの人は、特別の人であったと思います。これらの事情について、彼の受けた医学教育と当時の日本の状況をここで簡単に述べなくてはなりません。

Pompe は、オランダの軍医学校を卒業し、父はオランダ陸軍の将校でありました。この事は彼の日本における仕事に非常に役に立ちました。将校として又医師として彼は、自動的に当時の日本の武家が誇りを持っていた社会に受け入れられ、尊敬されました。Pompe にとって、医師であると同時に、将校でもあったと言う事実は、大変活動しやすい原因に成りましたが、彼の成功をより決定的にしたのは、彼が軍医学校で受けた教育であります。この学校は、18世紀終り頃 Leiden で創設されました。1822年、軍医学校はオランダの中心にある Utrecht に移りました。軍医学校の病院が軍の中央病院としての役割を持っていたため、この病院には複雑な病気の患者、治りにくい病人が国中の部隊から運ばれて来るのに便利であったからです。この病院には多数の病人が集められ、実地の手術と治療の教育のために非常に役立ちました。そして、その患者が亡くなったら遺体を外科の実習に使うだけでなく、特にめずらしい病気等病理学上の研究標本にも用いることができました。この軍医学校病院は、実際に軍医学校の一番重要な部分であり、この学校の特長は厳しく実践的な訓練と言う事でありました。入学条件が、非常にきびしかったのでこの学校は一番優秀な学生を集めることができ、4年間の教育内容は、植物学、解剖学、生理学、薬学、綱帯術、内科学と外科学であり、この軍医学校の卒業生の質は、非常に高かったのであります。この事は、この学校の卒業生のうち少なくとも13人が大学の教授になったという事実で証明されています。

軍医学校は、Pompe の仕事に役立ったばかりでなく、後に日本政府から長崎に医学校創立の要請を受けた時、すぐそのままモデルとなりました。この時 Pompe が一番安易な道を選ばなかったことは、彼の大きな信用となりました。たぶん日本人は Pompe に医学の教育を依頼した時、彼等自身何を求めているのか、自分で良くわかっていなかったと思われます。彼らはいくつかの実地教授、内科学と外科学の講義以上のものは期待していなかったのです。実際に Pompe がこの講義を始めた時、これらの講義、実地教授と薬学の課程は、沢山の生徒が集まりました。しかし、Pompe は、教育については断固としてゆずりませんでした。「もし、日本人が本当に真剣に医学を学びたいければ、一番良いものを選ばなくてはならない」そして、最良のものとは、すなわち Utrecht 軍医学校と同じものでなければならなかったのです。

1857年11月12日、あらゆる悪条件と戦って、Pompe は、学校開設の準備を整えました。修業課程は、5年と定められ、Utrecht 課程をモデルにして、次の各教科が含まれていました。物理学、解剖学、生理学、病理学、繃帯術、薬学、衛生学、内科学、実地教授、外科学、眼科学でした。又、Pompe が日本を去る前に短期間ではあるが、法医学、公衆衛生学、産科学の課程も増設されました。この彼の設けた課程は、Utrecht をモデルにしました。と言うのは、講義内容は、一番新しく大切な事実と学説だけに限り、その他大学レベルに相当する講義は行わなかったのです。それはただ学生達を混乱させるだけであったからです。Utrecht では、教官はできるだけラテン語やギリシャ語を使わずに、各々のテーマについてオランダ語で書かれた簡単なハンドブックを用いました。Pompe も長崎での彼の講義のノートに同じことを試みましたが、残念ながら薬学についての講義のノートが1862年に出島で出版されただけであります。Pompe は、自分の講義のために数多くの Utrecht におけるハンドブックを用いました。Utrecht で使われたいくつかのハンドブックは、原本だけでなく翻訳されたものも、日本で広く使われ、それらは今日でも古い医学上の蔵書の中から見つけ出すことができます。

Pompe がその教育を行うにあたって、直面した諸問題を、私達は軽くみすぎてはいけません。生徒達は基本的な知識は何もなく、又教えるのに役立つものもなく、全て自分で作らねばならなかったのです。そしてその上、言葉の壁にもぶつかったのです。Pompe は非常に努力して日本語を学びましたが、彼自身も認めているように長崎弁を少し覚えることが出来たにすぎなかったのです。しかしながら、彼の学生達は、オランダ語を勉強し、更に最もすぐれた学生である松本良順は、オランダ語が良くてきたので、Pompe を助け、Pompe と学生達は数ヶ月間の間に十分話ができるように成りました。しかし、一番重要な Utrecht プログラムは、まだ無かったのです。と言うのは、Utrecht の軍医学校が成功したのは、患者を収容する病院を持ち、実習する屍体を持つことができたからです。そこで、1858年に Pompe は幕府に附属病院設立の申請書を提出しました。またその申請書には、病院のために必要なものとして、解剖用の死体、図書館、化学実験室と外科用機械などを、強調しております。このためにオランダ領事館 J. H. Donker Curtius や長崎奉行岡部駿河守、松本良順らが根気よく運動を続けてくれたおかげで、1859年9月 Pompe は、初めて犯罪人の死体をもらい受けることができ、又、同じ年長崎養生所を設立する許可を得ることができました。この病院は、オランダ海軍分遣隊機関部士官 B. J. van Troje の設計によって建設され、1861年9月21日に完成されました。

今からそれを振り返って見れば、全てが簡単なことのようにありますが、Pompe は、軍医として日本に来て、多少の西洋医学を日本人に教えるように頼まれ、彼の受けた医学教育をそのまま導入しました。その教育システムは、Utrecht 軍医学校と同じにしましたが、それは当時の日本人の持っていた医学程度にとって最も適当なモデルであったのです。もし Pompe 自身の書いた「日本における5年間」、又、彼が蘭領インド医学雑誌に送った報告書

を読めば、私達は彼が彼の計画を実現するに当たって直面した色々難しい問題を知ることが出来るだけでなく、私達は、彼がどういう人であったかを知ることができます。又、彼は、どの様に思われても、強い意志を持って彼自身と学生に彼の作った質の高い教育レベルに到達するように努力した事がわかります。生徒から苦情・不満が出た時、彼はただ一言「医師は、自分自身のためのものではなく、病人のためにある。もし、そういう心構えがなければ、他の仕事を選ばなくてははいけない」と答えました。他の言葉で言うと Pompe は、技術の熟練だけを教える事に満足せず、医学に対する日本人の態度、また日本人一般の健康上に対する態度を完全に変革することを希望し、また医師とは何かと言う考え方を完全に変革しようと考えていたのであります。これらの理由で彼は、長崎市内を廻り、ゴミやくずを片付け、又、どの階級の人々にも同じように接して差別しないだけでなく、彼の診療所においても、又、日本人には特権階級のためのものと思われたところの、彼の病院においても、同じように差別をしませんでした。この病院が出来るとすぐにまた他の問題が起こりました。と言うのは、日本人の間では、当然この病院は日本人のものであると思い、日本的に管理したいと望んだからです。Pompe はそれらには耳を貸しませんでした。彼は官僚的な方法によって良いこともダメにしてしまう日本人の傾向を良く知っていたので、彼が最終的に病院の決定権を持つ事を要求したのです。

彼の主張は、現在の医師も病院の運営について同じようにかかえている問題であります。きわめて簡単明瞭なことであって、即ち、医師だけが病院をどの様に運営するかを決める事が出来るのだ、と言うことであります。病院の管理人として任命された人が、彼らの方法で運営しようとした時には、Pompe は簡単に彼らを追い出し、それより下級の人々にその仕事をやらせたのです。その当時の人として Pompe は、あまり偏見を持っていませんでした。Pompe の書いたものの中で日本人について辛らつな言葉は見つけられません。もちろん、ある種の日本人を彼は嫌いましたが、同じように外国人、オランダ人をも含み、遠慮なく批判しています。もちろん、彼の日本の学生が西洋の学生と同じように仕事ができるということを絶対に信頼しなかったとしたら、彼の努力はたぶん全て無駄に成ったことでしょう。医師として Pompe は、病気は西洋人も日本人も医別なく苦しめるものであることを知っていたので、日本人と西洋人の病人も全く区別しませんでした。同じく学生が患者を上流階級と下流階級と区別して扱うことも許しませんでした。病院では、実際治療上の手段として部屋を区別することを許しましたが、決して治療上の区別はしませんでした。ある人は、彼が売春に対して長々と記している文章に、彼のキリスト教的偏見が見られると言います。ところがここでも、日本の売春についての彼の説明は公平で、西洋の方がもっとひどいと言っています。彼の憤りは道徳的よりむしろ医学上のものであります。結局、彼の患者の半分以上は、日本人でも外国人でも同じようにあらゆる梅毒を持っていたのであります。

1862年、Pompe が日本を離れる時、彼はその日本で成し遂げた成果に誇りを持つ事が出来ました。彼は確固たる医学教育制度の基礎を築き、多くのオランダの病院よりも優れた病院

を開設し、又、中心となった彼の学生に医学とは何か、医師とは何かという新しい意味を教え込んだ事であり、この生徒の中から後に日本医学社会においても中心となる人が出たことであります。これだけでも大変な仕事であります、その上さらに、2回のコレラ、1回の天然痘の大流行によって彼の仕事は、より大変なものとなりました。その間、彼自身もコレラにかかり死線をさまよったこともあります。その上に、彼は医学以外の事柄も教え、また毎日の天気や気候の観測記録を、オランダ政府のために行っているのです。

彼は日本に来た時が28才でまだ若かったのですが、この5年間彼は、彼自身の全力を尽くしたのです。それで、彼が新しい医学を研究するためにオランダへ帰りたくと希望した事は私達が理解出来る事であります。その上に又、彼の日本政府への報告書にも書かれているように、学校には新しい人材と新しい考え方が必要でありました。彼の記録の中には、少し他の理由を見つける事が出来ます。開国前の古い日本を知っていた人と同じように、Pompe はゆっくり変わりつつある新しい日本のすべてが好きではありませんでした。日本の開国は避けることのできないことであり、Pompe のその間に果たした役割は大きなものでしたが、しかし、Pompe がむしろ理想として望んだ事は、日本の開国によって、次は西洋の一番良い事柄が日本へ入って来ることでありました。しかしながら条約で開港した所に世界中からやって来たのは、一早く富を得ようとしている様な人々ばかりでした。その結果日本人の外国人に対する態度も悪くなりました。やがて、これらの段階は過ぎるであろうが、Pompe はその事を不幸なことだと感じていました。そして又、Donker Curtius の後任者にも彼は大いに失望したのです。Pompe にとって時として必要であったオランダ政府の公式の援助も失われてしまいました。その上もっと重要な事は、新しい長崎奉行は、同情心のない人で、個人としてもまた Pompe の仕事に対しても全く理解のない人でした。Pompe は英国側が彼の病院を乗っ取ろうとしていると聞いて、今までの自分の仕事が“0”になってしまうのではないかと絶望に近い思いをしたこともありました。幸運にも Pompe の後任は Dr. Bauduin となりました。Utrecht 軍医学校で彼の教官でもありました Dr. Bauduin が彼の後任になったことは、彼の仕事が無駄にならず、逆にその後も継続して、もっと良く完全な方法で続けられることになりました。さらに D. Bauduin とその弟の影響で多くの Utrecht 軍医学校の卒業生がやって来ることになりました。幕末—明治にかけ、滞在していたオランダ人医師14人中10人が Utrecht 軍医学校の卒業生でした。同時に Utrecht 軍医学校は、日本の医学史上に大きな遺産を残したことになります。

1862年、大晦日、彼がオランダに到着した時、父や兄弟姉妹が歓迎会を開いてくれたことに、Pompe は非常に喜んだことを私達は想像できます。残念なのは、彼が日本で収集したものを積んだ船がインドネシアの海上で難波し海に沈んでしまったことであります。ところで、帰国直後の喜びが消えてしまうと、Pompe にも他の帰国した人と同じような問題が生じました。私達が毎日、新聞で知る海外で数年を過ごし、日本に戻った人々が社会にとけ込むのが難しいのと同じ事です。西洋人にも同じ問題があることを日本人は、余り理解で

きていませんが、Pompe の場合、この問題は非常に大きかったと私は考えています。彼は日本で本当に良い仕事をし、日本人からも、日本に滞在していた外国人からも、非常に尊敬されていただけでなく、その5年間は、彼の思うままに振舞うことができて、誰に支配されることもなかったのです。それなのにオランダに戻ってからは、単に Dr. Pompe van Meedervoort 海軍2等軍医でしかなかったのです。

彼の日本での経験は、彼をある程度特別な人にしましたが、オランダにおいてはこの経験はあまり尊重されなかったのです。その上、日本の変化は非常に急速であったので、彼がオランダに戻った時には、彼が持っていた日本での知識は、実際上はすでに古くなっていました。いかなる方法を以てしても、彼は結局日本の専門家にはなれなかったのです。もちろん、彼は自分の著書「日本における5年間」で日本の専門家に成ろうと試みました。しかし、この本は立派な本ではありませんでしたが、出版された時には、既に完全に時代遅れのものでした。そして今日までこの本の一つの役割は、Pompe の活動資料としての価値しか持っていないのです。要するに、彼の日本での経験は、その後の経歴の基礎にはなりません。逆にむしろ、色々な意味で彼の発展を妨げる事になったのです。Pompe にとっては、日本から帰った後のオランダはかなりつまらない所でした。オランダでは心理的な意味でも、物理的な意味でも、日本に居る時と同じように自ら進んで挑戦できるような、満足のゆくような、また報いられることが大きい仕事がありませんでした。日本は彼の人生において到達することのできた頂点であったのです。従って、その後の人生は根本的に日本で得たもののほど面白いものではなかったのです。Pompe の個人的悲劇は、若い時に人生の頂点を極めてしまった事です。しかし、彼は帰国後、日本での輝かしい日々を他の人に聞かせるだけの人になってしまったと言う訳ではありません。事実、彼は一生懸命自分の挑戦できる仕事、自分が指導力を発揮できるような活動の場を捜していました。

オランダ海軍において日常決まった通りのつまらない仕事と極度に遅い昇進の道は、もちろん彼を海軍に長く留まりたいと思わせませんでした。オランダに戻って2年にならないうちに、Pompe は自分の意志で海軍を辞め、Den Haag で医師を開業しました。その間日本人留学生団の世話をすることで、彼の生活も活気づけられました。彼は医学生、伊東方成、林 研海、法律学生の西 周、津田真道等、その他幕府の軍艦開陽丸を作るために滞在中であった幕府海軍の派遣隊員の世話役もしました。これら留学生達から Pompe が受けた非常に重要なことは「日本における5年間」の日本の歴史的部分を書くにあたり彼らに助けてもらえた事です。それは自分で集めた数々の資料が船とともに沈んでしまったからです。

開業医としての生活も Pompe にとっては、明らかにきわめて限られたものでしかありませんでした。彼はオランダ赤十字協会において非常に積極的に活躍し、何度もその国際会議にオランダ代表として出席し、1883~1893まで、彼はオランダ赤十字協会委員会の委員を務めました。又、1870~1871年の普仏戦争の時は、オランダの救護隊を率いて Saarbrücken

に滞在しました。Den Haag にいた時は、オランダ人エリート達で構成されている“de Witte”と言うクラブの理事になり、そして1872～1874年 Den Haag 市の市議会のメンバーにもなったのであります。

一般の人々にとっては、これらの活動は全て充実した非常に満足できる生活であったでありますが、Pompe にとっては、まだまだ充分満足できるものではありませんでした。それは次のことから証明できます。1874年に日本政府、岩倉具視に求められて、彼のかつての教え子榎本武揚が、ロシア皇帝の宮廷に日本の特命全権公使として派遣された時、その外交顧問として行くことを喜んで受諾したことから明らかであります。彼は Den Haag の開業医を辞め家族と一緒に St. Petersburg へ赴いたのであります。2年間のロシア滞在后、Pompe と家族はオランダに戻りました。再び彼は開業医として落ち着こうとしました。今回は、地方都市の Bergen op Zoom という街でした。しかし又、彼の関心は開業医として止まることを許さなかったのであります。

彼は、カキの養殖事業に次第に興味を燃やし、そして実際に Bergen op Zoom でカキ養殖業の創業者の一人となりました。1880年には、彼は既にカキ養殖者として登録され、成功したように見えました。オランダ大蔵省は、彼を Zeeland 州の漁業委員会のメンバーとして任命し、1891年まで彼はその仕事に携わっています。彼は Bergen op Zoom で重要な実業家となりました。その事は、その地の商工会議所のメンバーとなり、1890～1893年までその議長を務めた事でもわかるのであります。

Pompe は、すでに60才になっていました。そして彼の人生の最後まで地方の名士として、又オランダ赤十字協会での活躍など、いくつかの国家的な、国際的な活動に貢献しようとしたと思われます。しかし、運命が、いやもっと具体的に、天候が彼の計画をすべて打ち壊しました。1890年の冬の異常な寒さはカキ養殖を破滅させ、それは又 Pompe 自身をも破滅させたように思われます。1893年 Bergen op Zoom を去り、その後かなり不安定な生活を送っています。彼が亡くなる年、1908年まで Pompe は色々な所に移り住んでいます。ベルギーの Nieuwpoort に行き、次にオランダに戻り Maassluis と Den Haag に移り、又ドイツの Wandsbek へ、そして又オランダの Apeldoorn に戻っています。Pompe は Brussel で亡くなりましたが、この町は、彼の娘が住んでいたもので、彼は良く出かけていた所であります。

私達は、この間の事情についてはあまり多くのことを知ることが出来ませんが、Pompe にとって最後の10年間の生活は苦しかったにちがいないようです。彼はしかし、その間医師として働いていたようです。それは1908年 Den Haag の日本公使館の三等書記官の第三子、大島蘭三郎の出産に立ち会い手助けしたことでわかります。特に日本人にとっては、近代医学を日本へ紹介した、非常に大切な人がその晩年を問題なく落ち着いた暮しを送ることが出来なかったと言う事を知ること、少し悲しい思いをされることでしょう。しかしながら、Pompe 自身にとっては、最初の頃の日本での仕事が非常に良い結果をもたらした事に大い

に満足していることでしょう。

最後に、Pompe は大きな遺産を残しました。“いつまでも忘れられない” とくにこの長崎の地で、ということです。やはり、孔子の言を借りていえば「Pompe 死而不朽」。

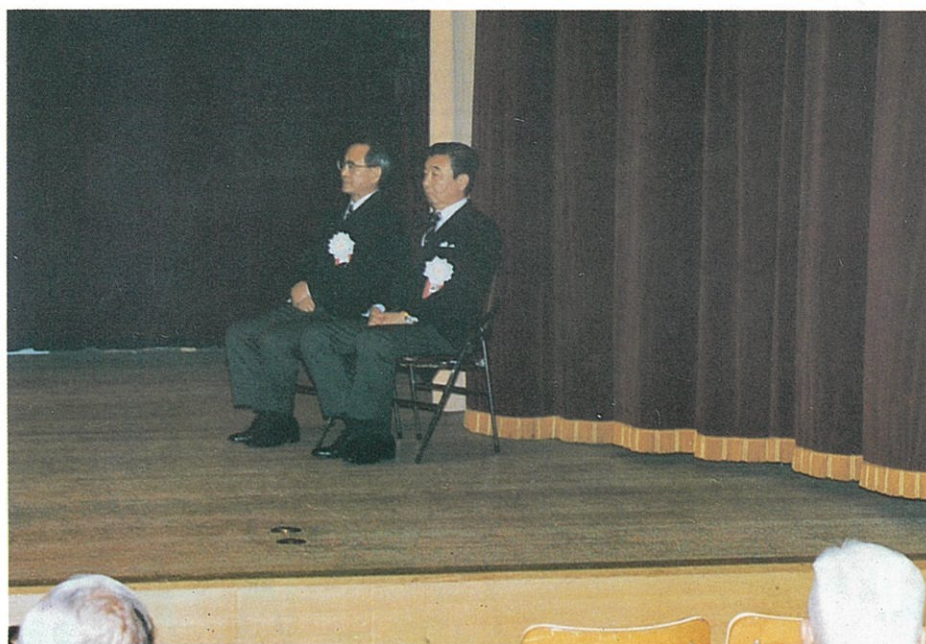
この講演にあたって資料を送ってくださった Leiden 大学の H. Beukers 先生と F. Vos 先生並びに東京の沼田次郎先生にお礼申し上げます。

写

真

~~~~~





長崎大学医学部創立130周年記念祝賀会々場



長崎大学医学部創立130周年記念祝賀会々場







## おわりに

本記念誌の編集に際して、国立療養所長崎病院の中西啓先生にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

また、この記念誌の作成に際して、長崎医学同窓会、財団法人輔仁会、昭和42年度長崎大学医学部卒業クラス会、十八銀行および三信会原病院の原三信院長に御支援をいただきました。深く感謝申し上げます。

---

---

長崎大学医学部  
創立130周年記念誌

昭和63年12月15日 発行

発行 長崎大学医学部  
〒852 長崎市坂本町12-4  
TEL (0958) 47-2111

印刷 ニシキ印刷株式会社  
〒852 長崎市平和町12-10  
TEL (0958) 45-7131

---

---

